

特 232

701

賀川豊彦著

普及版

キリ
スト
山上の垂訓

四貴島セツルメント出版部

始



特232
701



スキ
トリ

賀川豊彦著

山上の垂訓

普及版

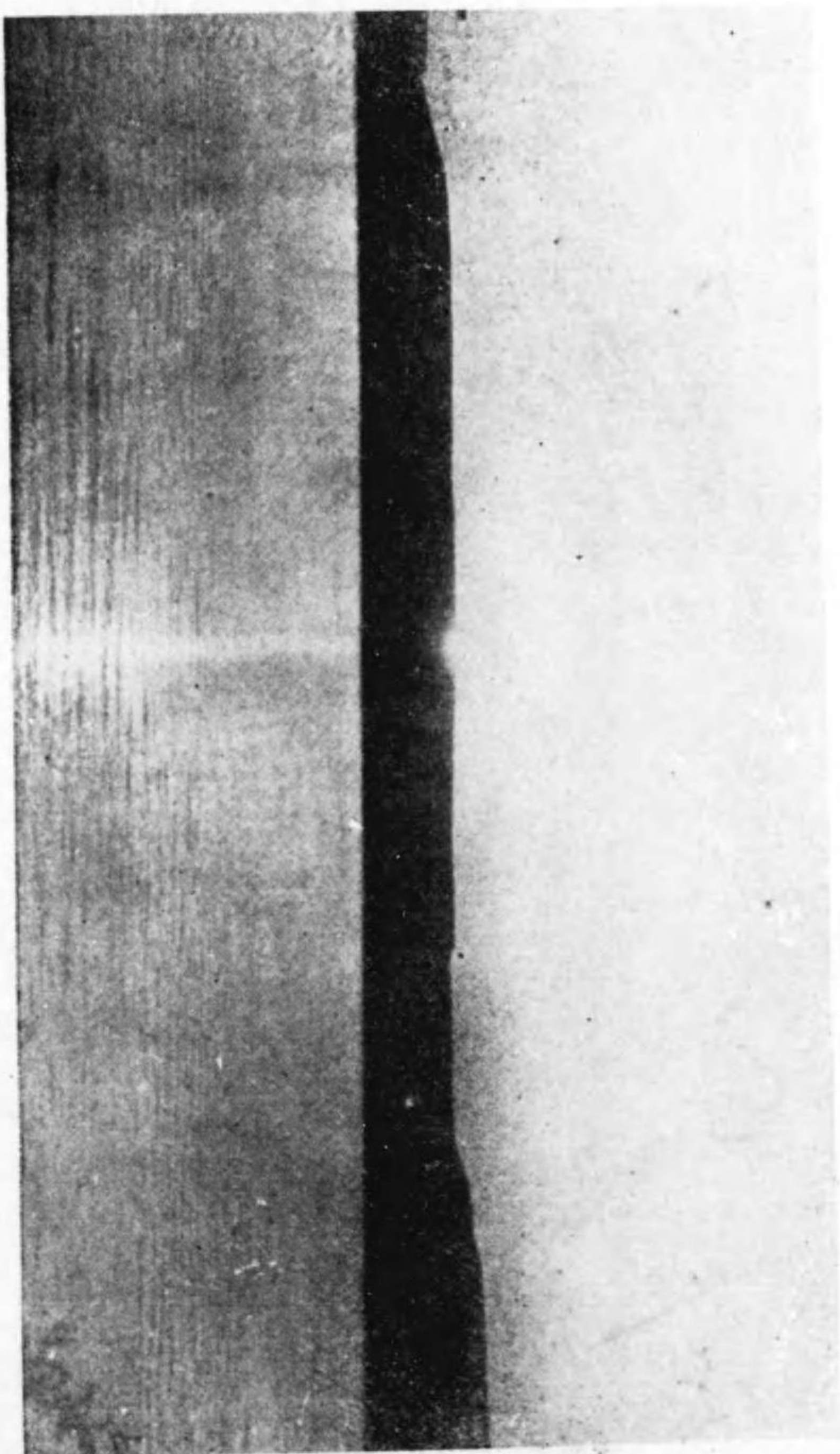


山上の垂訓

賀川豊彦著

東京大学図書

喀の湖ヤラリガ



序

それは最も喜ばしき思出である—— ガリラヤの昔を偲び、その野邊にて語られし人間至上の聖訓を思出すことは。私にとつてガリラヤの自然と、イエスの山上の垂訓を切離して考へることは出来ない。神の最も不思議なる秘密が、キリストを通じて人類に話し掛けられる如く、神の言葉としての大自然も、キリストの言葉の中に泌み出てゐる。野の百合に、空の鳥に、葦に、夕空に、磽地に、島に、荊に、薊に、大麥に、燕麥に、そしてそれ等の上に、人間社會の最も温い涙と血が、イエスの言々句々の一つ一つの上に現れてゐる。彼の言葉は至上の藝術であり、珠玉であり、寶玉である。その短い言葉の中に、その譬に、その教訓に、

彼の涙と血が泌み出してゐる。ヨハネ傳の著者が、神の「言葉」がキリストであるとしたことに、深い意味がなくてはならない。神の言葉はキリストである。

永遠の言葉よ湧き上れ。日本の野に、山に、岸邊に、爐邊に、永遠の言葉よ響き渡れ！ 隠れて掩れざるはなく、掩れて示さざるなき永遠の言葉よ、日本の泥土に浸み込んで行け！ 藁葺の小屋に、貧民窟の二疊敷に、永遠の言葉が浸み入る日まで、日本に永遠の國は確立しない。野に叫ぶ聲、巷にて聴かざる、その清く朗かなる言葉、それはすがくしき碧空にかゝる清き月にも似たる姿であり、永久の慰めである。私は越後の雪に、貧民窟の泥溝に、日本アルプスの峻峯に、石狩の平野に、この永遠の言葉を瞑想して、それが唯にユダヤの荒野に於て慰めの言葉で

あるばかりでなしに、日本に於ても慰の言葉であることを深く信ずる。

憂鬱なる東洋が神の光を待つことは久しい。然し光は東からでもなく西からでもなく唯衷なるものから發せられる。永遠の言葉が魂の内側に泌み込むことなくして、東洋の憂鬱は去らないであらう。私は印度のロンボに、馬來半島のシンガポールに、香港に、上海に、そして日本の長崎に、そんなことを考へながら、世界を祈りつゝ遍歴した。昔は魂の爲に、地理的巡禮が必要とせられた。然し今、眞の巡禮は、魂の内側に於て、高く昇るそれで行なはなければならない。魂の巡禮者にとつて、キリストの山上の垂訓ほごよき道しるべはない。この言葉無くして、富士もその輝きを隠し、瀬戸内海も、その東雲の瞬を忘れる。私は日本の爲に、

さうだ、日本の最上の美の爲に、イエスの言葉に更に一層深く浸潤して行く。

一九二七、九、一四、

賀川 豊彦

豊前県早良郡早良町早良会にて

この書は、私が一九二七年の夏、女子豊民福音学校の學生に講演したものである。それを筆記してくれたのは今井よね子女史である。私はその中で、もし云ひ足りないと思つたところがあつたので筆記しられたものに附加し加筆して行つた。私の眼がまだ悪いものだから、私はまだ當分かうしたことを續けて行かなければならないであらう。これを出版せられる太田老兄、その爲に努力して下した姉妹達に心より感謝する。

スキトリ 山上の垂訓

目次

第一章 九つの福祉 (宗教序説) …………… 一

人間至高の行動基準—少數の弟子への教訓—神への昇り道—無よりの出發—貧乏金持—
無念無想の精神療法—天國とは何處か?—辛味に秘めた甘味—柔くして硬く飢えて飽く
もの—外套の半分を乞食に—神を見る法と神の子になる工夫—天國の運動の被迫害者—
宗教的福祉の網羅—「地を嗣ぐ者」についての瞑想—「我」の刻印運動

第二章 完成の道 (歴史と道德の頂點) …………… 四

盞と味—燈火は臺の上に 律法と豫言との完成—「勝らずば」の高調—愛と殺人—分厘をも
償はずば 性道德の完成—結婚制度と離婚問題—虚偽の問題

第三章 完全なるものゝ姿 (隣人愛への進出) 八一
 二里の道―神の如くならんとする意志

第四章 神との對座 一〇二
 祈の本質―祈は迷であるか?―神の國運動―パンと苦難に就いて

第五章 野の百合の凝視 一三三
 宗教訓練と禁慾―搾取なき世界

第六章 社會生活の黄金律 一四七
 イエス語録―世評の樞目―「畜生」の問題―求めて與へらるゝ世界―黄金律

第七章 人生表現と人生効果 一六〇
 羊の姿の狼―薊と無花果―最後の一撃―天來の權威

第一章 九つの福祉

―宗教序説―

人間至高の行動基準

澄み切つたガリラヤの空は、ほんとに美しい。遙かに地中海の水平線を望み
 打續く高原の北には、雪を戴くヘルモン山がシリア平原を睥睨して聳え立つ
 てゐる。

ガリラヤ湖は足元に古鏡を投げ出したように青錆びて見え、その東にはギレ
 アデの山々が板を積み重ねたやうに特異な姿を現してゐる。ガリラヤは實に美
 しいところである。この美しいガリラヤで、美しいイエスの詩のやうな垂訓が
 與えられた。

それは、人間至高の行動基準であり、最高の人間藝術の手本である。凡ての



九つの福祉

宗教はそこに奥の院を發見し、凡ての社會改造運動はそこに出發と結論を同時に發見する。

それは徒らな空言でなく、生命の躍動そのものから湧き溢れた言葉であるから詩として我等の心を捕える。

私と私の社會運動は、このイエスの山上の垂訓から出ないものである。そしてレニンでもクロバトキンでも、もしもこのイエスの山上の垂訓以上に出たところがあれば、私は教えて貰ふ。それは宗教運動に就ても云へる。世界の宗教で山上の垂訓以上に出得る宗教が何處にあるだらうか？ 佛教、儒教、神道、マホメット教、印度教、バハイズム、何々何々——それはこの山上の垂訓にみな含れてゐるではないか？ 山上の垂訓は、あらゆる宗教の序曲であり、結曲をなすものである。

それは單なる學問でもなく、單なる倫理でもない。それは人生の運命に關す

る宣託であり、宣言である。

それは勝利である。人間として勝ち得た最高の的である。この的を持つことによつて、人類は墮落し得ざるところまで引上げられて行くのだ。

山上の垂訓を読むものは、最早や、昨日の彼ではない。彼は新しい人間の姿に變貌してゐる。あらゆる反キリスト教も、結局は山上の垂訓の圓周を彷徨してゐるものにしか過ぎない。プラトニー、アリストテレス以後凡ての倫理學は山上の垂訓の直徑の上をうろついてゐるようなものだ。

私は幾千頁かの倫理學を讀んで結局、山上の垂訓以上の何ものをも習はなかつた。さうだ、山上の垂訓は生命の脈搏を我等にまで押しひろげてくれる。それは實行したものの、魂の記録であつて、學者の寢言ではない、そこには神がある。完成がある。

私は暫く黙想して、再びイエス・キリストの言葉に聴き入らう。何と云ふ美し

い聲！ 何と云ふさわやかな聲であらう。それを繰返し聞くだけで、全世界が甦るやうに見える。それは魂に取つての最上の肥料であり、良心に取つて最後の藝術である。

静かに語り給へキリストよ、我等の心が、充分その扉を開き得て、あなたの持つ光明が、室の隅々にまで届くやうに。何と云ふ光榮！ 何と云ふ福祉であらう！ 私はガラヤの二千年の昔に歸り行かなくとも、魂のガラヤに、野邊の百合と、空の小鳥を偲びつゝ、心を落付けて、キリストの言葉に聞き入らう。そこには青草が萌え出で、アネモネがハツチンの山腹に咲き亂れてゐる。

キリストよ、語り給へ！ 私等は、二十世紀を隔て未だに新らしいあなたの言葉が聞きたい。今はあなたの姿を目前に見ないけれども、魂の眼には、あなたが善く見える。さらば、私は再びマタイ傳を開いて、あなたの美しい言葉にも一度聞き入らう。

少数の弟子への教訓

マタイ傳第五章の一節に「イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給へば、弟子たち御許にきたる。」とある。山にのぼり坐し給ふと書いてある爲に、普通マタイ傳第五章、第六章、七章にわたつて書かれてゐるイエスの教訓は「山上の垂訓」と呼ばれて來た。傳説に據れば、此の山といふのはガラヤの西北部にあたるハツチン山であると云ふことである。私は一昨年此の地方を訪れた。ハツチン山といふのは、峯が角の様に二つに分れ、それはく美しい山である。或人々はそれを「幸の山」(Mount of Beatitude)と呼んでゐる。

どうしてイエスが此の山に行かれたのか解らないが、それは多分イエスの日々のならばしとして山に引籠る習慣があられたから、その方面に行かれたものであらう。イエスが人なき所に行かれたといふ習慣は例へばマルコ傳一章の終に

「この後イエスあらはに町に入りがたく、外の寂しき處に留りたまふ。人々四方より御許に來れり」といふ所にも現れてゐるが此時も恐らく此の氣持であつたやうと思はれる。餘りに評判が高くなつて、町で大騒動をせられるものだから、山に引籠もられたが、群衆は其處迄もついて來た。「群衆を見て」とあるのはその爲である。扱此處に區別せねばならぬことは、山上の垂訓は、大衆への話ではなく少數の弟子への教訓であつたといふことである。「イエス群衆を見て山にのぼり」とある様に、大勢であることを欲せられなかつたので山に這入つて行かれたのであらう。所が少數の弟子だけがそれに從して行つたのであつて、大勢であつたならば、マルコ傳四章やマタイ傳十三章にせられた様な平易な話をせられねばならないが弟子達だけであるとすれば自由に話をされることが出来る。それで山上の垂訓は極少數の人々に話された、主としてイエスに獻身したものに對する内面の教訓であつたと考へてよからう。それはイエス。

キリストの言葉のうちのマタイ傳にある山上の垂訓と同じ言葉がルカ傳十二章にあるが、その中に「懼るな小さき群よなんぢらに御國を賜ふことは、汝らの父の御意なり」(十二章卅二節)とあるのを見ても明らかで、山上の垂訓はその方面から考へても少數に向つての話であつた。つまり少數が山に來てゐる間に話されたものである。然し他の所では屢々切れぐに話をされた模様であつて、ルカ傳には三四ヶ所に分かれて書かれてゐる。ルカ傳六章廿節から廿九節迄は、マタイ傳五章の終の部分に、ルカ傳六章廿七節から廿九節迄は、マタイ傳五章の終の部分に相當してゐる。ルカ傳六章の卅節から卅六節迄は多少書き方が違つてゐるけれどもマタイ傳五章の終に相當し、ルカ傳六章卅七節はマタイ傳七章一節に、ルカ傳六章四十三節以下はマタイ傳七章の終の部分に、更に又ルカ傳十一章にはマタイ傳の山上の垂訓の一部にある主の祈に關する教訓があつて、マタイ傳第六章にふさわしい所である。又ルカ傳十一章卅三節から卅

六節迄は、同じくマタイ傳第五章十一節から十六節迄へ這入るべきものである。更に又ルカ傳十二章二十二節から卅四節迄も亦同じくマタイ傳第六章十九節以下にある山上の垂訓の中に加はるべきものである。

斯くマタイ傳五、六、七章の山上の説教はイエスが屢々それを分割して話されたものであるか、又歴史的に云へば數回に亘つて話された數個の説教を山上の垂訓としたのであるか不明である。ルカ傳では話された境遇も場所も違つてされてゐるものが、マタイ傳にはハツチン山上、麓に多くの群衆を残して置いて少數の弟子にゆつくり話されたことになつてゐる。

それは別問題として、山上の垂訓は、イエスが余程興奮されたときの話である。何か大變動があつた場合に山上の垂訓をされた様である。イエスは壁頭第一に感激のことはを連らねて居られる。そしてその言葉は弟子達に忘れられない記憶と印象を残したものでらしい。此の言葉は、ルカ傳にも最初の

部分に云つて居られる。

幸福なる哉、心の貧しきもの、天國はその人のものなり。幸福なる哉、悲しむもの、その人は慰められん。幸福なる哉、柔和なるもの、その人は地を嗣がん。幸福なる哉、義に飢え渴くもの、その人は飽くことを得ん。幸福なる哉、憐憫あるもの、その人は憐憫を得ん。幸福なる哉、心の清きもの、その人は神を見ん。幸福なる哉、平和ならしむるもの、その人は神の子と稱へられん。幸福なる哉、義の爲に責められたる者、天國はその人のものなり。我爲に人、なんぢら罵り、また責め、詐りて各種の惡しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。(マタイ傳第五章三十一節)

この幸なる哉、幸なる哉、の使ひ方はソロモンの歌と云ふ、イエスが来る前多分二百年頃に流行つた歌の作り變の様にしてイエスは云はれたものであらう。或はもうちやんと覚え書きを作つて居つて、それをポケットから取り出して讀まれたのかも知れない。

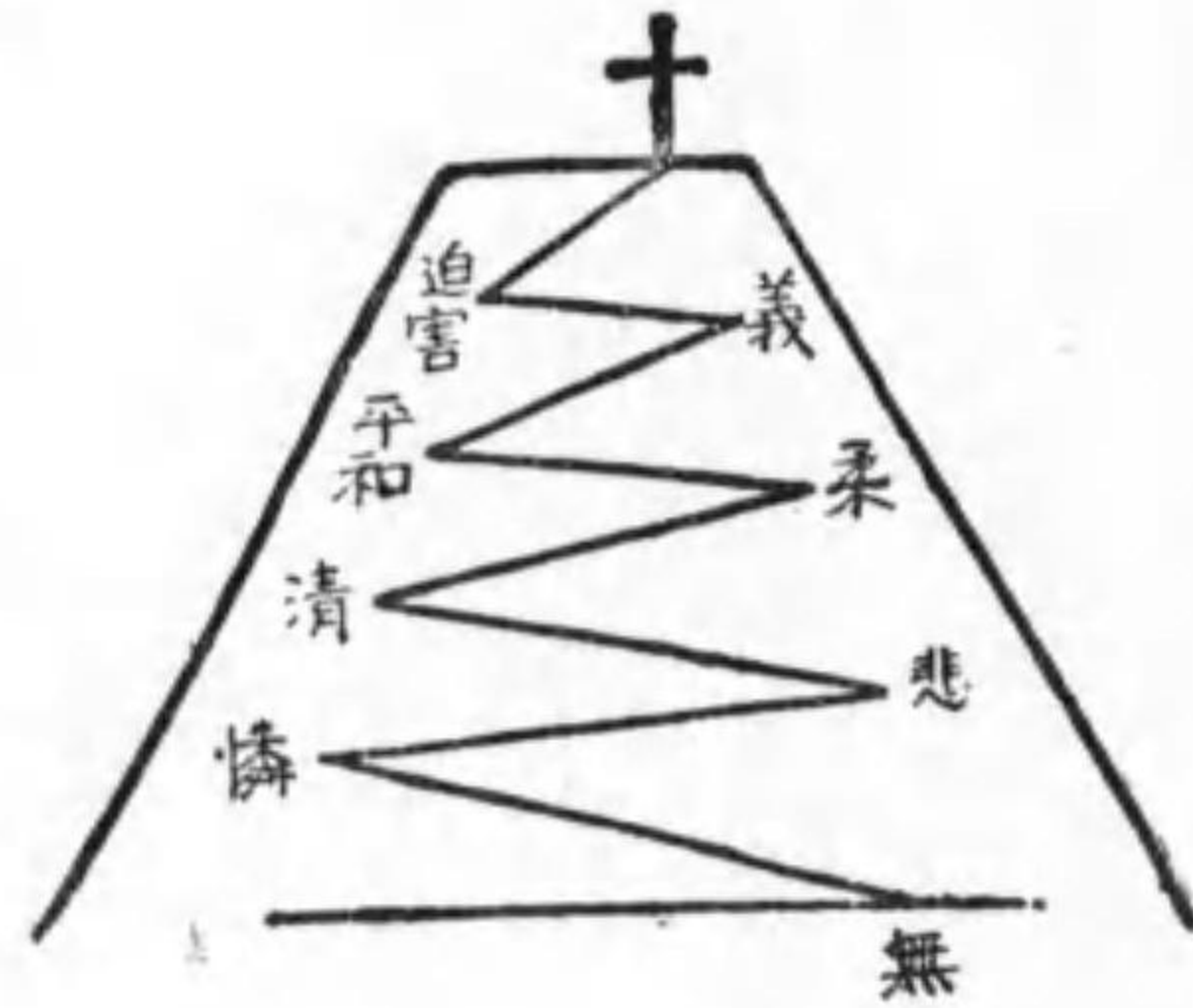
神への昇り道

私は最近九つの幸が次の様な組織になつてゐることを發見した。

消極的 …… 貧 …… 悲 …… 柔 …… 義
 積極的 …… 憐 …… 清 …… 平和 …… 迫害
 結論 …… 我爲に立つもの

即ち初めの四つは消極的方面の問題であり、後の四つは積極的方面の問題であつて、最後の「我爲に人様々の悪しきことを云はんその時は幸なり」と云つたものが結論になつて居る。そして私はこの九つの順序を、十字架の山に登る道筋であると考へてゐる。即ち無(貧)から出發して、憐に行き、憐みから、悲しみに、其處に心の清さの必要を感じさせられ、柔和を見出し、世をして平和ならしめ、義を慕ひ、遂には迫害を蒙つて十字架に迄上るといつた道筋になる譯である。

更に又その消極的方面の福祉を考へて見てもその間に正しい順序がある。成長の爲に貧乏があり、撰擇に際して悲しみがあつて、力を持つが故に柔和さな



り、理想あるが故に、飢え渴く如く義を慕ふといふことになる。即ち此の四つの消極的福祉の内に、成長、撰擇、力、理想の法則を備へてゐることを發見す

る。之は又、積極的福祉の方面に於いても同じことであつて、成長の爲に憐があり、撰擇に際しては清きにつき平和ならしめる力があり、目的の爲には迫害せられる。かういつた風に、積極的方面の福祉も亦、前の四つの福祉と共に順序を持つて排列されてゐることに氣づく。

第九の福祉は「我がために人、なんぢらを罵り、また責め詐りて各様の悪しきことを言ふときは汝ら幸なり、」といふ前の八つを総合したものに就いてであるが、イエスは此處で、特に「我が爲に」と

云つて、凡ての眞理は人間の眞理として生きて行かなければ駄目である、眞理は斯うだと云つても、凡ての人間行爲は自分で示さなければ何もならないといふことを示して居られる。イエスは聖書の爲に迫害せられると云はない。神の爲に迫められる時とも云はない。「我が爲に責められる時」と云はれてゐる。眞理は人間を通じてのみ現れる時に權威がある。物や機械の法則は我を通さないが、人間の眞理は人に基點を置くことが大切である。イエスはその我に基點を置いた。貧しいこと、悲しいこと、柔和なこと、義にうろたふること又は積極的方面の幸福に就いても、煎じつめれば我を高める所のものである。此の着物を着、勉強をし、神を信するのまつまりは自分の爲であり神を拜むのさへも自分が潔くならんが爲であり人を愛するといふのも、自分が神の姿になる爲である。だから人を愛するのは結局大きな自分の爲であつて、その報がよし此の世で來ないにしても、次の世で必らず來る。「喜び喜べ天にて汝らの報は大なり」と

はそれを云つたものである。

私はこの九つの福祉を今一層詳しく瞑想してみたい。

無よりの出發

幸なる哉心の貧しきもの、天國はその人のものなり。(マタイ傳第五章三節)

大抵は貧乏が嫌ひで金持ちになりたい。だが金持にも二通りある。金持貧乏といふのは、何萬圓あつても、まだ何萬圓足りないといふ「足りない貧乏」でその人達は足りない、足りないといふことばかり云つて居る。お互の身内のものを考へて見たらこの部類に屬する人が多々あるであらう。金持は何時も足りない足りないといふてゐる。自動車足りない、妾が足りない、倉が足りない、別荘が足りない、を連發するのが金持である。私は之を金持貧乏といふ。

貧乏金持

今一つのは貧乏金持で、之が本當の金持であると私は考へて居る。元來が裸で生れて來たので、家を持つて生れて來た譯でもなし、着物を着て來たわけでも無い。もつて生れた臍の緒さへも切つて出て來たので、何一つない。舊約聖書の中にあるヨブと云ふ人物は、財産をなくし、子供をとられ、自分の身體はくさつて妻が彼を捨てた日にも、「神興へ、神取り給ふ、エホバの聖名は褒むべきかな」と神を讚美した。多くを持たうとするものだからクヨクヨするのであつて、裸で生れて來たのだから、今着てゐる着物のあることが有難いと思へることが出來れば、餘りに苦勞をせず済む。土地成金や、借家成金にならうと思ふから足りぬ足りぬの貧乏に罹るのであつて、色々な苦情を云ふことをやめ、裸で生れたといふことから出發すれば焦燥は無くなる筈である。私は少

さい時から貧乏をした。數代前から私の家に淫蕩な空氣が這入つて、兄は妾を七人も置くといつた生活をした。めに、家も、庫も、納屋もすつかり人手に渡つて家には全く何もなくなつた。屋敷の土までが、吉野川の堤防の爲に持つて行かれて仕舞つて、文字通り屋敷に穴があいて居つた。私はさういつた間に成長して悲しいことをばつかり考へてゐた。

然し人間は、親切の仕合ひをして行くならば、食べるだけのものはある筈である。東京市や大阪市に二百十五萬の人間が住めることは、村の人達が物を持つて來て呉れるからで、少し親切のしあひをすれば食ふことだけなら心配しなくつても済むべき筈である。その日、その日に親切をするならば、多く持たら、貧らうといつた考を持たないで済む。貧らうとする所から、つまり、餘り多く儲け様とする所から、キリストに來て見ても、彼の云つて居ることが一向解らない。儲けてやらうと云つた所から信仰に這入つても、到底宗教など解るもの

ではない。日本の信仰は儲ける爲に這入ることが多い。毎年一月十日に西宮の戎詣りをやる。一圓奮發して賽錢に上げ、「どうか一萬圓儲けさせて下さいませ様に」と祈る。全くの取引信心で、かうしたにも不拘す、儲からないとすれば「戎さん何だい、儲けさせて呉れぬ。だめだ」といふ。神戸の貧民窟にKといふ賭博打ちが居た。ある日神棚に燈明をあげて拜んでゐるから覗いて見ると賭博に使ふ一升樹の中に賽ころを入れて、神の力の這入る様にと祈つてゐた。それから四五日経つた或日の夕方私其處を通るとKは土べたに樹も神棚もたゞきつけてゐる。そして「先生こんなものあかしまへんから、やつつけてますんや」と云つてゐた。彼は人間の方に神を利用した。そして神にこちらを向けどいつた要求をしたのであつたが、吾々の信仰は、吾々を作り、吾々を生かしてゐる力によらうとするのであつて、吾々の髪、骨、血は凡てその力によつて作られてゐることから出發するものなのである。血は一日に體の中を二百四十哩

廻り歩るく。誰がポンプで押してゐるのか。不思議ではなからうか。そりやあたり前だと云ふかもしれないが、妙なあたり前である。目がぱちくりとあいて、田植もせぬに頭の上に髪が生えるのが、私は不思議で仕方が無い。劇場の芝居には五圓の入場料が要るが電氣のきらくした、眼のぱちくりした地球上のドラマは入場無料である。かう考へるから、私は餘り、貧乏を苦しめない。何にもないことから此世を始めたから、少しでも何かのあることは儲けものである何も無い所から始めることは、吾々にとつて大きな幸福である。何も無しから皆が出發することが大切である。一から始めることである震災の時日本橋茅場町の藝妓はお櫃を持つて逃げ歩いた。又忘れもしない、呉服橋々畔に巡査が立つて逃げ惑ふ人に、「生命が惜しかつたら、荷物を捨て、お逃げなさい」さう忠言をして呉れたにも拘はらず、生命より荷物の方が大事な人があつた。そしてカチ／＼山の様に多くの者が荷物と共に焼け死んだ。越後に「八萬圓ばあさ

ん」といふのが居つた。それは乞食をしてためたので、死ぬときには惜しくてならず、その幾分を呑んで死んだといふのである。私はその記事を、明治卅五年頃の萬朝報で読んで吃驚したのであつた。無から始めれば、こんな妙な考を持たずにすむ。何もなしに、あつさりど、持たない前に何も無かつたことから始めると善い。着物を一枚持つて、これは儲けものだど喜ぶ人と、一枚持つて猶三枚足らぬと泣く人と、どちらが幸福であらう。私は三枚足らない人が氣の毒で仕方がない。私は四圓廿錢の一枚着の金持で喜んで飛び廻つてゐる。

無念無想の精神療法

それは又病を癒す工夫である。むしやくしやしてゐて、彼處から懸を取つて、あの金を斯うしてと、むしやくしやしてゐては、いくら醫者にかゝつても、容易に病氣は癒らない。先づ頭の中をからつぽにすることにである。宗教の秘訣は其

處にある。私は殆んどあらゆる個所の病氣をした。眼も耳も鼻も肺も腎臓も悪かつた。然しあまりその爲に苦勞をして居らない。やきもきしたつて仕様がな。い。十七才の時略血して、もう死ぬだらうと思つた。そしてどうせ死ぬなら善いことをして死なうと思つて、貧民窟へ這入つて行つた。貧民窟は戸締りがな。いから、空氣の流通が善い。そして私の肺病はだんく癒えて行つた。醫者が病氣を癒すと思ふのは間違ひで、醫者の援けを借りて吾々の内なる力がなほすのである。今は手術でも餘り麻酔劑を使はない様になつた。開腹手術をする場合ですらも、それ等は内なる力の發展を防ぎたくない爲である。ちつとしてゐたら病氣は不思議に癒るものである。神の力、不思議な力でも云つたらよからうか。時によると薬を使ふことが却つて治療をおそくする。蠶を見たと善い。蠶が繭の中であばれるか動き廻つたら駄目ではないか。中で凝乎として死んでゐる様に見えてゐても、時が來ると美しい翹が生えて飛び出せる。神に委せた

ら善い。凝乎としてゐたら翹で飛べる日が来る。やきもきしたら魂を見失つて結局虻蜂とらすになる。静かにして、何もない所から始めると結局よくなる。禪の工夫がそれで、何も考へるなどいふことを云ふ。徳利に泥水が這入つてゐるとすれば、その上に醬油を入れても駄目である。一度それを明けてから醬油を入れるのでなければならぬと同じ様に、最初を貧乏にして、からつぽにしてかゝることが大切である。であるから、本當に生命の工夫をする人は心をかからにしてから生命の水を入れることに努力する。その方が遙かに天國に近い。

天國とは何處か？

「天とは一体何處ですか。丸い地球の上ですか、下ですか」私はさういふ質問をうけるかもしれぬ。元來宗教とは人間以上の力を神といふので、天といふのは超越の力といふことを意味するのである。生きた、人間以上の力を神と云

ひ、天と云ひ、超越の力と云ふ。その力を知れば、それに生きる工夫をすればそれで足りる譯である。それは一人よがりの仙人の道では無い。伴天連の法で術を使ふ道でもない。宗教運動とは、神の國運動である。一人が善いのみならず、貧民を、労働者を、盲者を、被壓迫者を、片輪を救ふのが宗教運動である。松の皮と蕎麥粉とを食ふて、大峯から高野山に飛ぶことのみが宗教では無い。如何なる人材をも、自分以上のものに迄持ち上げ様とする。それが生命のある生き方である。だから、無から初まる宗教運動は、本當の天國運動となる。

辛味に秘めた甘味

幸福なる哉悲しむものその人は慰められん（マタイ傳第五章四節）

「君、神でもあるものが何故悲しみを作るのか、何時も楽しくどうして造らない。悲しむのが幸福とは何事だ」誠にそれは云ひ分のある云ひ方である。然

し「幸福なる哉悲しむ者、その人は慰められん」とはかう云つた意味である。行くべき道に間違ひがあつたとき氣附く。目的と違つた方向に行つてゐたことに氣附く。その時に今迄の生活に對しての悲しみが湧いて来る。悲しいと氣のついたものが幸福だといふのである。精神病者が、若し自分は精神に異常があるといふことに氣づいたときは、もう氣が違つてゐるのではない。悲しい生活であつたことに氣附く人が悲しくない世界に這入り得るのである。氣狂ひには痛い感じが殆んどない。それでストロヅの中に手を入れる、火のあるストロヅに手を入れ、ばやけぞをして痛いといふ氣附いて、やめ様と努力する人は、もう氣が違つて居らない人である。詰り、氣の附く人が確かな人であると云ひ得る。之を社會的に云つて見ても、飲んだり買つたりして濟まなかつたと氣のつく人は正氣になる望がある。

もう一つの考へ様は、悲しみが世にある方がおもしろいといふ見方である。

それは一個人のみでなく、社會全体から云つてもさうである。若し死ぬことが絶対に無いとしたら、どんなものであらう。喧嘩をする人や、梅毒で鼻を落した人間ばかりが溜つて、醜い、意地悪い世界が来る。いゝ人ばかりなら幸かもしれないが、仲々さうはいくものではない。神は死を以つて惡を省き、善きものを残さうとした計畫をされる。省く爲には死は入用である。又悲しみも、生命で之を征服し得る人にとつては面白いものである。笑ふのよりも緊張する方が面白い場合はいくらもあり得る。折にはほろりとしたものであるから、うどんやそばを食べるときに唐芥子を入れる。それと同じ様に、人生も辛い處に甘味がある。私は以上に擧げた様なことを悲しみに對する工夫だと考へてゐる。

柔くして硬く飢えて飽くもの

幸なる哉柔和なるもの、その人は地を嗣かん (マタイ傳第五章五節)

此處にイエスは、強い方とは違つて、柔かいものゝ方が善いのだと云つて居られる。若し人間の体が硬いものであつたとすれば、どうであらう。大きな面には、体の外側を柔かくして置いてから伸び上らなければならぬ。そんな面倒のない爲に、外側の柔かいことは便利である。一尺の子供が五尺の大人になる迄に、毎年二三度も皮を脱がねばならぬとすれば、それはどんなに大變であらう。だから世が進化する爲には柔かい方が都合が良い。

飢え渴くことと義を慕ふものは幸なり。その人は飽くことを得ん。(マタイ傳第五章六節)

少しでも直く仕様とする努力を持つ人、その人の方が之で善いと思つてゐるキリスト教徒より、佛教徒より遙かに善い。之で濟むと思へば出たらめ生活にもなるが、直くならうと努力して居るものにはさうした生活のたるみがない。之等の四つの廻り道、心の貧しいこと——無から出發することの樂しみ、悲しむこと、柔和なること、義に飢えかわくことが寧ろ神への近道であること

をイエスは教へて居られる。

外套の半分を乞食に

此の反對の側にある四つの悲しみ——積極的廻り道——については次の様に教へて居られる。

幸福なる哉憐憫あるもの。その人は憐憫を得ん。(マタイ傳第五章七節)

イエス・キリストは何か憐れみをする人、弱者を引き上げ様と努力する人が結局は幸福であると云はれた。自分より困つた人、盲者、病人、犯罪者、白痴、發狂者等を活すること、さうしたことをする人が無ければ、世の中は立つて行かない。近頃の新小説の中には憐れみと云つたことなど少しも見當らなくて、我儘な姦通といつたことで一杯である。アルツバーセフの小説などには妹を強姦することが書いてある。新らしいか知らぬが、餘り新らし過ぎる。日本人が

概して講談が好きなのは、その中に義侠な所があり、憐があるからで、新小説より講談の方が人間的で面白いからである。舊い日本の中には、何處かに憐があつた。佛蘭西の丁度日本で云へば靖國神社に相當するパンテノンにマルチンの繪があるが、彼は佛蘭西で(千六百年前)最初キリスト教を信じた士であつて、冬の日自分の着て居たマントの半分を乞食に與へた。すると夢の中に半分のマントを着た人が現れたので誰何してみると「耶蘇だ」と云ふ。嫌はれてゐる耶蘇かと云つてみたが「キリストの教とは憐れみである。君は今朝貧しきものに、着物の半分をやつて呉れた。その精神がキリストの精神である。全部やれと云ふのではない。餘る部分をやつて呉れ」と云ふのだ。それがキリストの精神だ。さう教へられて、マルチンはキリスト教の信仰に這入つた。キリスト教とは妙なものでは無い。乏しい中から分ける精神がキリストの教にはある。マルチンは之に共鳴してキリスト教になつた。そしてイエスは此處に明らかに憐ある

者が幸福だと云つてゐられる。

神を見る法と神の子になる工夫

幸福なる哉心の清きもの、その人は神を見ん(マタイ傳第五章八節)

神を見せて呉れ。そしたら自分は信心する。さう云ふ人が仲々多いものである。然し、見なければ信心出来ないものであらうか。自分の顔を、自分の眼で見ただ人があるか。それには、蟹の様に眼に柄をつけない。自分の脊中を見ることも大變である。胃袋もあると信するのであつて、見なくつともあると信せらるれば善いではなからうか。同様に、天の上なる神といふのは、我々を生かしてくれる生命の神のことであるから「生」きるとわかるのである。神は同時に又心である。だから心で見なければならぬ。心とは何か? 物ならば一つにしか動かない。然し「心」は二つ、四つ、十六、三十二……無限に成

長し變化し自由自在に働き得るものを云ふのである。神とは心の無限絶對の境地である、だから、心は心に通ずる。その心が濁つて居たら神は解らない。心の聖いものが本當の宇宙の意志を發見し得る。憐れみの爲に人の爲に苦勞して始めて神が解る。イエスの磔刑は貧民の爲、犯罪者の爲であつた。心の澄んだ人でなければ此の事實は解らない。或人は生活のどん詰り迄行つて、却つてキリストが解る。つまり心の清いときに神が解る。

幸福なる哉、平和ならしむるもの、その人は神の子と稱へられん。(マタイ傳第五章九節)

之は喧嘩をしてゐる者を調和させる者が幸ひだといふことである。人間の心は色んな方向に向つて居るけれ共、結局は一つである。賀川は一人である。内なる心は一つだから、神は一つであり、心は靈であるから眼に見えない。

宇宙が多岐多様だからと云つて、決して神が多くある譯では無い。多岐多様なものを、平和ならしむるもの、愛の力で統一させるもの、愛で團結せしめるも

のは、此上もなき幸福な人である。この人が神の子と稱へられるとイエスは云つた。「何、焼いたら灰だ」と思つて居た人間が神の子になることは大きな出来事である。灰になると思つて居る時には、價値がないから、女郎買ひや、賭博打ちが平氣で出来るが、神の子になつたら、無駄なことは出来ない。これ迄はむかふをむいて拜んだものが、自分が神の子になつて來ると本尊のありかゝ違つて來るさうなれば此の身体に價打が出来て來る。神の子が一寸放蕩することば出来ぬとして自づから自分の生活が高まつて來る。

天國の運動の被迫害者

幸福なる哉義の爲に責められたるもの、天國はその人のものなり(第五章一〇節)

と云ふのは神の子の生活を續ける者は義の爲に責められるといふことである。佐倉宗五郎は農民の重荷を自ら引きうけた。吾々も人の爲に苦しむ氣になる

と、此處に亦新しい幸福が増して来るものである。私がキリスト教徒の間で
廢娼を云つても、誰も反對しないけれど、松島遊廊の真中へ行つて、女郎を解
放せよと演説したら來てなぐる者が屹度出て來る。然し黙つて居ては良なる日
が來ない。大阪の真中に立つて、悪い所を指摘するならば、いくらかよくなる。
責苦を覺悟して勇敢にする者がなければよくなる例はない。耶蘇教になると家
が八釜しく云ふからならず置くと云つた弱虫では駄目である。義の爲
に迫害をも忍ぶ覺悟がなければ世の中は良くならない。吾々は廻り道をする
が最後の勝利は吾々のものである。眞理は人間を通じて働く。人間が善くなら
なければ凡てに意味は無い。

何を云つても一番正直な生活をしたのは、イエス・キリストである。彼は自分
の爲に苦勞する人間でなければ駄目だと云つた。「我がために人なんぢらを罵
り、また責め許りて各様の悪しきことを云ふときは汝ら幸福なり。喜び喜べ、

天にて汝らの報は大なり。百姓、勞働者、病人が困つて居れば、之れを援ける
のがイエスの精神である。その爲に苦しまなければ眞理は役立たない。世の大
衆の前に引き上げ様とするときに、悪口されるのは覺悟しなければならぬ。
社會運動をした人々には、それが解る筈である。正義の爲には、悪口も、磔刑を
も辭さないといふのでなければ、世の中の改造など思ひも寄らぬことである。
以上述べた様な順序でイエスは眞理の道、——人間が神に迄行く道を教へた。
即ち

- 1 心貧しきもの……天國の領有
- 2 悲しむもの……慰められん
- 3 柔和なるもの……地を嗣がん
- 4 義を慕ふもの……飽かん

消極的

- 5 憐あるもの……憐まる
- 6 清きもの……見神
- 7 平和ならしむるもの……神の子
- 8 迫害……天國の領有
- 9 眞理を我のうちに生かす

積極的

四つの消極的な幸福と、四つの積極的な幸福とを合せて、最後に眞理をして自分の中に生かさしめ、神にのり移られる。それは恰も、引力の法則が吾々に働く如く、生命の力が魂の髓まで這入つて来る。その力は酒に酔ひ、放蕩に身をくづした時にしつかりやれど激まして呉れ、人を救はんとして力足りないときに、盡きない力を與へて呉れる。自分の中に新らしい力が七度生れ出て来るかくして貧乏をして、貧乏をせず、我々は労働者の味方となつて、無駄を省き。日本を引上げる工夫をしなければならぬ。

宗教的福祉の網羅

私は曾て華嚴經を讀んで、その莊嚴な教訓に驚いたのであつたが、私は華嚴經の書き現さんとした「十地」が、山上の垂訓の九つの福祉に對應することを考へて非常に愉快に思ふたことであつた。華嚴經に於ては、イエスが簡單に述べられた神への階段を、非常に委しく説いてゐる。私は華嚴經がまるで山上の垂訓の九つの福祉の註釋本であるかの如く考へて非常に面白く考へたことであつた。九つの福祉は短い文句であるけれども實に意味の深いものである。貧しいものが天國を領有する。それが宗教の結論ではなからうか。一寸考へると、天國の領有といふことが宗教であるとは思へない様な氣もする。そして普通宗教といへば自分だけが聖くなるといふ氣がするらしい。然しイエス・キリストの運動では明らかに天國の領有が宗教運動そのものであつた。イエスは九つ

の幸の中、先づ第一に、心の貧しきものは天國を得る。次に、悲しむものは慰めを
 柔和なるものは地を嗣ぐことを、義を慕ふものは飽くことを、憐あるものは憐
 を得、心の清きものは神を見る。そして平和ならしむるものは神の子と唱へられ
 第八に義の爲に迫害を被るものは天國を領有するといつて居られる。つまり第
 一の福祉と終の第八の福祉の二つは天國を持つことであつて、之には深い意
 味がある。凡ての結末はこれを見たいが爲である。つまり結論を始と終とに置
 いた譯であつて、慰められることも、地を繼ぐことも、飽くことも、憐みを得
 ることも、皆最後の目的は天國を領有することに他ならない。それは宗教の方
 面のいゝ部分を全部指したものである。

普通の考へ方によれば慰められると云ふことは、宗教の最も大切な要素であ
 る。病氣になると宗教から慰めを得るといふのなご全くそれである。

次に地を嗣ぐこと。之も亦宗教の大切な要素である。天國の領有では無いが地

上の大きな相續、天下泰平、國家安定の問題である。次の飽満な生活、詩篇に
 よくある山の鳥の不足を知らぬ充實したる生活、憐みある氣持、それは宗教の
 要素であつて、佛教精神の精髓は憐であるとも云ひ得られる。神を見ること、
 神の子になることが宗教の大事な部分であることは云ふ迄もない。かう考へて
 見るときに、此處には宗教の各方面の意味があつまつてゐることを發見する。
 殆んど宗教の定義が盡せてゐると云へるかも知れない。獨逸中世紀の宗教哲學
 の人々は宗教が悲しみといふことだけを取扱ふものゝ如くに考へた。トラビス
 ト修道院に行く人達も亦その傾向の人々である。故有島武郎氏が八釜しく云
 はれた充實した生活、それは第四の幸福「義に飢え渴く者は幸なり、その人は飽
 くことを得ん」に他ならないし、禪宗で重きを置く所は見神の工夫に過ぎない
 様である。更に又淨土眞宗では平和な氣持を持続することが、その根本である
 と云つた風に、殆んど此の九つの福祉は宗教の凡てを合したかの觀がある。

私は宗教の序説として「九つの幸」ほど美しい幕開きは無いと思ふ。之で宗教の氣持は盡されてゐる。宗教とは九つの幸に準じて進むものと考へれば、他に言葉は全く要しない。宗教とはこんなものであつて、慰め、國家を榮えしめ充實した生活と、憐ある心を持つことがその本領である。成長した氣持にもなれるし、更に正義に向つて突進も出来る。最後に最も強いのは、我に於いて生きるキリストの姿に似たる所を見出すことである。之を一々解剖すればいくらかも尊いものが出て来る。私はその一つ一つを瞑想するだけでも随分深い意味があると思つてゐる。

地を嗣ぐ者についての瞑想

ゾラの書いた三つの大きな小説といふのは、「勞働」「多産」「金」だと云はれてゐるが、その中「多産」といふのは、佛蘭西の産兒制限に反對した小説であつ

て、或る貧しい純潔な夫婦がズント／＼子供を生んで行く話である。私は之を讀んで―彼が立派な科學者であるからと云ふともあるが―非常に感じさせられる處が多かつた。吾々は單に楽しい嬉しいと云ふだけでは無く、最も良い子供を地上に残して行かなければならない。さうした柔和な高い生活を送る人々が美しい林檎や、葡萄が蕃殖する様にふえて行くことは、どんなに神の榮を表はすことであらう。それを考へるだけでも幸福な氣持に成り得られる。イエスは對比として天をいふのみでなく、地のことを云はれた。宗教家は地のことを忘れ易い。地上のことはうるさい、穢い、と考へ易いにも不拘らず、イエスがこれについて明かに教へられたことを私は嬉しく思ふものである。日本にドイツからシルレル博士といふ方が來られて普及福音教會といふのを建てられたのであつたが、博士はその著「キリストの眞理」の中にはつきり次の様なことを云つて居られる。「文化を興へない宗教は、宗教として價値が無い」と。シルレル博士は明

らかに文化の來ない様な宗教なれば宣傳する必要が無いと云はれたのである。何故、明治時代にプロテスタントの信仰が日本に這入つたか。それは思想に於て、文明に於て、プロテスタントの持つそれが日本よりも高かつた爲ではないか？ 當時の佛教がアメリカよりも高い凡ゆる文化を持つてゐたならば、キリスト教は日本に這入り得なかつた。私は常に云ふ、日常生活が常に宗教から暗示を得れるものでなければ宗教は存在の價值が認められない。宗教と科學が、宗教と美術が、宗教と道徳が離れた様に見えるけれども事實は決してさうではない。勉めて、地を嗣ぐ考へ方を廻らさなければならぬ。日本の禪宗が家庭生活に這入つたのは、其處に簡素があり、雅味があり、美しさがあつたからである。それと同じ様にキリスト教が日本の家庭生活を修正出来ないとするればその意義を認められない。即ち地を嗣ぐ、地上に於ける文化を高め得られなかつたとすれば宗教に生命はない。

宗教は一切の價值運動の根原をなすものであつて、人間生活に關する價值運動が、宗教と分離する時には宗教は衰へて來る。その反對に一切の價值運動が生命價值として、宗教の中に綜合せられる時に、その宗教は非常に強いものとなつて現される。地上と天上とを區分する間、まだ眞に生命の價值運動の本質に就いて考へが纏つてゐないと云ふことが出来る。寢ることに食ふことに、結婚に社會生活に、其處に上向きの運動が見られるのでなければ、宗教と云ふものは地上に於て不必要なものであると云へる。であるから各自は各自の立場で何等かの貢獻をする必要がある。何でも構はない。吾々が若し農村で傳道し様と云ふのであれば、村の文化を高め得られる様な何かを持つことが先第一である。傳道だから宗教だけを修めたら良いと云ふのでは不可ぬ。宗教運動はそれでは意味をなさない。今迄の宣教師に二種あつた。所謂傳道だけをした人と、價值を高める、或はクツキングにせよホームライフにせよ文化を高める宗教運

動をした人があるが、宗教は凡てを高める様にすれば、自づから擴るものである。之は唯宣傳の方法に過ぎない様であるが、之が亦宗教の本質である。地を嗣ぐのであるならば子供の事を忘れてはならない。山の頂に寺を建てたり、教會に引籠つたのでは駄目で、株式取引所をまでも占領するだけの力を持ちたいものである。私は此の九つの幸、を華嚴經の十地を讀む積りで、遐想しつゝ讀まれんことを希望するものである。

「我」の刻印運動

我がために人、なんぢらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを云ふときは、汝ら幸なり
(マタイ傳第五章十一節)

此處ではキリストが我爲にと云つて居つて随分高慢ちきな云ひ方をしてゐられる様にもとれるので、あの謙讓つたキリストの言葉としては變だ。キリストとしては餘りに高慢ちきな氣がすると云ふ人もあらうと思ふ。然し宗教の

本質は何と云つても「我」にある。現在のキリスト教徒は、愛を高調されるものだからちきに我を忘れる。華嚴經を讀んで考へることは憐が高調されてゐると同時にどんなに他人に善いことをしたにしても、お前自身が神の姿に似ることを忘れるならば、何もならないことを主張してゐることである。現在の社會運動にはその傾向があるのであつて「愛」を高調するが我を忘れるといつたことがあり易い。その結果自己内省を缺き、魂の高舉を忘れて取返しのかない破目に陥り、凡ての標準が失はれて仕舞ふ。どんなに社會運動をしても私が神の姿になることを忘れては意味がなくなる。ルカ傳十章廿節に「汝等の名が天に記されしを喜とすべし」とあつて只文化生活をしただけでは不可ないし又神を見たゞけでも不完全である。凡てを合せて、吾々の名前が天に記されることを望まなければ本物ではない。私は華嚴經に教へられて、キリストが云はれた「我」といふ意味をもう一度考へ直す様になつた。つまり宗教とは、宇宙の

中に我を印刻する運動である。だから私はコー教授の「宗教々育の社會學說」だ
 けでは満足出来ない。宗教の眞の試金石は「我」である。「我」によつて神の
 奥深く這入つて行かねばならぬ。「我」によつて迫害をうけるとイエスは云はれ
 たがキリストの様な「我」について行く者には必らず迫害が来るのであるとい
 ふ實に嫌なことが書いてあるのである。罵つたり、責めたり、詐つて様々の悪い
 ことを云つたりする。即ちキリストの様なはつきりした人格について行くこと
 は人に褒められる様だが仲々さうは行かなくて却つて罵られることが多い。「お
 祭りに遊びに来い」「おゝ行かう」といつた調子で行けば良いが「つまらぬから
 行かない」と云へば屹度反對せられる。酷い連中になると御輿を擔いで来て家に
 あたる。それのみではない嘘を云つてまでせめることをする。それだけの覺悟が
 なければ、正しいことに味方しおほすことは出来ない。私は此の結論が大好き
 である。イエスは神の爲に責められると云はない。神の爲に罵られるとも云は

ぬ。神がキリストに乗り移つた以上キリストは神の性質を持つてゐる、我に
 も神に乗り移つて貰ふことによつて、「我」の標準を高めて、「我のために人様々
 の悪しきことを云はん」といふことを辭さない程度に迄ならねばならない。
 傑らさうに云ふ所には覺悟がなければならぬ。その時には十字架が仄見える。
 ユダヤの國では豫言者は苦しめられることに相場が極つて居つた。時代に先ん
 じた人達は餘りいゝ生活をしない。實際どういふ譯か解らぬが寄生的な生活を
 したがる。或生産に寄生してそれで満足し、他を少しも顧みないと云つた生活
 が随分多いものである。さうした寄生々活を振り切つて、神の正義を打立てや
 うと思へば、迫害せられることゝ苦しむことを初めから覺悟せねばならぬ。イ
 エスはこの十字架を初めから弟子達に強く教へられたのであつた。

第二章 完成の道

— 歴史と道德の頂點 —

鹽 と 味

汝らは地の鹽なり、鹽もし効力を失はば、何をもてか之に鹽すべき後は用なし、外にすてられて人に踏まるゝのみ (マタイ傳第五章十三節)

キリストは此處で鹽といふことを瞑想して居られる。一体如何にして此處に鹽といふことが這入つて來たか？ ユダヤには鹽が多い。死海の邊に何百尺といふ鹽の層があつて、實に見事なものである。それを掘つて外國にも輸出してゐる。ユダヤでは又鹽物を食用にすることが多かつた。又味付けにも鹽以外のものは一寸無かつたのである。そんなことからイエスは鹽のことを考へて、此の物語りをせられたものであるらしい。それで純潔な人を鹽だと考へられた。

純潔な人の存在することは腐るべきものの腐りをとゞめ、味無きものに味を與へる。こゝでは主として、腐敗を止める力、生命を保存する價值保存をするといつた點を云はれた。片岡健吉氏がよく「俺が居なければ自由黨が腐敗する俺は鹽でな」と云はれたさうである。政治運動にたつた一人純潔な人が居ると腐敗をとゞめる。日本の様な國に住んでゐると鹽といつたことを考へることが割合に少いが、砂漠に棲んでゐる人達は、鹽のことをよく考へる。鹽が生命の價值を保存する力は大きいものである。私は先年眼の爲に食鹽注射をしたので、その爲に矢張り鹽のことを屢々考へた。鹽は殆んど血液と同じ働きをするから、血の足りない時には食鹽を注射する。

吾々は血であり、鹽である役目をしななければならない。農村が次第に悪くなりつゝある時に黙つて居れば、その儘悪くなつて行き、誰かゝ悪い！と云つて止めればそれで方向を轉換し得られる。藝者町か遊廓が出来るのを喰ひ止め

たい。かういつた人は、きついかから大抵嫌がられるが、それも止むを得ないことである。日本では、鹽を潔めの爲によく使ふ。軒に、竈に、相模の土俵に潔めのときに必らず鹽を置く。特に労働者街に住めば住むほどさういつたことが多いので、鹽のことを考へる。又腐敗を止めるといふ點から見ても、鮮魚など今では氷に詰められて來るが、昔は皆鹽をして運搬したものである。宗教は價值保存をその一つの機能としてゐる。宗教によつて初めて價值の保存が可能である。イエスはその事を此處に云はれたのであつた、宗教は亦人生への味附である。それであるからイエスの譬には非常に意味が深い。

燈火は臺の上に

汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るゝことなし。また人は燈火をさもして升の下におかず、燈臺の上におく。斯くて燈火は家にある凡ての物を照すなり。斯のごとく汝らの光を人の前にかゞやかせ。これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父を崇めん爲なり

(マタイ傳五章十四—十六節)

山上の垂訓は前に述べた通り少數の弟子に向つてせられた。そして汝等少數のものは、世の光であると云つてゐられる。光は燭臺の上に置かれるのが普通である。イエスが山の上にある町は隠るゝことなしと云つて居らるゝ言葉は、ユダヤに行かなければ解らない。ユダヤでは城を高い山の上につくつてゐる。シロ(Sich)と云ふ「城」の如き、全く思ひもよらぬ山の上に、日本では云へば摩耶山の寺の様に見える處にある。ユダヤのキリアテヤリム、或はエルサレム、シオンなど岨のてつべんに要塞をもうけて、ごちらからも攻められぬ様にしてゐる。その様子は、ユダヤに行つてみて初めて解るので、千尺も二千尺も高いところに建てられてゐる。だから光もさうせよと云はれたのである。又人は燈火をともして樹の下に置かない。高い所に置く。それは汝らの父の證とする爲である。隠れたる所に置かすに、人の前に輝かせよと云はれたのである。鹽が價值の保存を意味するなら光は價值の創造を意味する。イエスは「光の

子」を作ることが宗教の本質であると思へられたのである。光は自分手に光る
自分手に光る運動が宗教運動の本質である。自主、自立、自治、自由、永久に
人を照す光たれどイエスはすゝめたのである。

律法と豫言の完成

われ律法また豫言者を毀つために來れりと思ふな、毀たんまで來らず、却つて成就せん爲なり。
誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ行かぬうちに、律法の一語も廢るることなく、悉く全うせらるべし。
この故にもし此等のいと小さき誠命の一つをやぶり、且その如く人に教ふる者は、天國にて最小さ
き者と稱へられ、之を行ひ、かつ人に教ふる者は天國にて大なる者と稱へられん。

(マタイ傳第五章十七節—十九節)

自分は律法や、豫言を捨てる爲に來たと思ふなどイエスは云はれるのである。
「我」を主格とするイエス・キリストの立場と、在來あり來つた道德運動との關
係をイエスは明瞭にせられた。律法には色々な種類がある譯であるが、大別
すると「物に關する法律」(物的法律)と「人に關する法律」(人的法律)と

の二つになる。それが更に色々複雑になつて來るから細かいことは省略する。
で、「法」といふものを此處では餘り六ヶ敷考へないで「人間の道德を社會的
に結晶させたもの」と考へて差支えなからう。人間の道德の中には公私共に
知、情、意の三方面がある。

知……………真 偽……………正 直
情……………美 醜……………禮 儀
意……………善 惡……………善

その中でも禮儀の部分はユダヤでは極端に八益しくつて、變則的と思はれ
る位、全く想像がつかぬ程複雑な、餘計なものになつて居つた。それですら
イエスは「私の來たのは、律法を毀つ爲ではない」といはれたのであつた。ユ
ダヤの律法といふのは最初十誠の形で與へられたものである。十誠には神に關
するものと、人間に關するものがあつて、神に關して四つ、人に關して六つ

の規定があつた。その後それが細分的に詳説せられて神に關するものとしては利來記、出埃及記、申命記等に書き現され「私」に關するものは、申命記やタルムードといふ傳説が守らるゝに到つた。イエス・キリストがマルコ傳七章八節に「汝等は神の誠を離れて、人の言傳を固く執る」また云ひ給ふ「汝等はおのれの言傳を守らんとて能くも神の誡命を棄つ」と云つて居られる。傳説を守るのは、日本でも舊い家などでは陰陽道で何でも決めて、動きがとれない。そんなのが今でも残つて居る。イエス・キリストは間違つたことは排斥されたが根本的律法に對しては、決して破壊され様としなかつた。「私は破壊的な立場で來たのぢやない。律法の一つをも破壊し様とはしない。」と云つて居られる。

豫言者とは、歴史の方向を指示するものを云ふのであつて、例へば、明日必ず太陽が昇る、といふことも赤ん坊は必ず大きくなるといふことも、前

から方向が解つてゐるから云つて置くことが出来る。それと同じ様に、或優れた人々には、或時代の方向が解るものである。こんなに悪事が漲つて居たら必ず反抗する者が出て来る。今の様に飲酒家が多くては日本の經濟も道徳も立つて行けない。何事かゝ来る、かういつた事を時代的に豫言することが出来るものである。であるから豫言をするといふ傾向がユダヤ人の間にはズーと残つて居つたのであつて、之を近頃の言葉で云ふならば、文明批評家といふのに相當する。社會主義では唯物史觀といつて、資本主義はそれ自體で滅びるといふ結論を出してゐる。マルクス派の辯證的批判といふのが即ちそれであるが、イエス・キリストは、その豫言者の道をも破壊し様として來たのではなかつた。キリストの來たのは凡てを成就せん爲、即ち棟上げの爲であつた。柱があつても棟がなければ家は出來ないと同じ様にキリスト・イエスの來たのは、善い方面を進める宗教を教へる爲であつた。

「勝らずば」の高調

我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者、パリサイ人に、勝らずば、天國に入るこゝ能はず

(マタイ傳第五章二十節)

當時ユダヤには學者と云ふ特別の階級があつた。ユダヤの聖書は最初ヘブル語で書かれたのであるが、ユダヤ人がアツスリヤ地方に捕囚になつてゐる間に東アラメエク語を使ふ様になつて仕舞つた。それでヘブル語は紀元前五百年頃から彼等の間に忘れられてしまひ意味を解することが出来なくなつた。それから教會の中には丁度今救世軍で外人の説教を士官の方が翻譯する様に、ヘブル語をアラメエク語に翻譯する係があつた。それが茲に云ふ學者であつて、彼等は間違ひなく聖書の言葉を云ふことが出来た。然しイエスがこゝに「汝等の義學者パリサイ人に勝らずば」と云はれたのは、學者が必らずしも、言葉を知つてゐる様に、實行してゐるといふ譯には行かなかつたので、それを攻撃せられて

のことであつた。

次のパリサイ派といふのは、その由来を考へてみると、紀元前三百三十年頃アレキサンドル大王が希臘のマセドニヤから出て來て世界の王となつた後又アンチカス・エピファネスといふ王の一族がアレキサンドル大王の後を嗣いで小亞細亞の王となつたが、ユダヤには鐵槌派といふのが現れて、アンチオカス・エピファネスの一派を追ひ出した。其後マカベの人達が此の地に君臨し紀元前七十年頃まで續いたのであるが、その頃又ローマからシーザーがやつて來てユダヤを占領することになつた。こんなことで、餘りに幾度も國を亡ぼされるものであるから、ユダヤ人の間に迷信が起つた。と云ふのは、ユダヤ人が神の言葉を守らなくなつたからかういつたことになるので、今後神の言葉を守らない人々とは、絶対に交際しないと云ひ出した一派があつた。之がパリサイ宗の起りである。それで、パリサイ派とは、正義團といふ風に説く人もあれば、分離派

といふ風に考へる人もある。どちらかと云へば、私は分離派と見た方が正しいと思つてゐる。彼等は世から分離した。分離して世の悪と離れて行つた。もう一つの派はサドカイ派である。Nadok ザドックと云ふのはヘブル語で正義といふ意味であつて、サドカイ派には希臘哲學の感化が頗る多かつた。主として希臘の唯物論を奉じて希臘思想そのまゝであつた。

もう一つエッセネ派といふのがあつたが、それは聖書には出て来て居らないがジョセファスの歴史には出てゐる。ユダヤの荒地で、四千人以上の人が仙人の様な生活をして居り、日の出、眞晝、日没の三回に必ず太陽を禮拜して居つた。之をエッセネ派といふのであつて、何にも屬さないものであつた。アレキサンドリアの哲學者フネロによると彼等は立派な共産生活を送つた人々であつた。以上の學者、パリサイ、サドカイ、エッセネの執れにもイエスは屬して居なかつた。イエスは云はれた。「お前達の正しいことが、聖書を鸚鵡返しに繰返し

てゐる者以上に正しくなければ駄目である」と。クロムウエルの流を酌んだリチャード・バックスターが「勝らずば」といふことを良く高調する。ピユリタ・スピリットは「勝らずば」といふ所にある。高位に、高官に、金持に、位あるものに信仰あるものに勝らなければ天國に入ることには出来ない。第五章廿節は、勝らずばと云つて、キリストアンの優秀性を高調するものである。

愛 と 殺 人

— 第六誠の敷衍 —

古への人に「殺す勿れ、殺す者は審判にあふべし」と云へることあるを汝等きけり。然れど我は汝らに告ぐ、「すべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。」(マタイ傳第五章廿一—廿二節)

之はイエスが「汝等パリサイ人に勝らずば」と云はれた言葉の註釋である。又之は十誠の第六誠の「殺す勿れ」に就いての説明である。申命記には「殺す勿れ、殺すものは審判にあふべし」となつてゐるが「されど我は汝らに告ぐ」となつ

て居る。之が山上の垂訓に權威のある所であつて、今迄はかうであつたが、「我が」新しき教を興へるといふのである。「されど我は汝らに告げん」といつた體驗、道德律、之がイエスの中に權威がある理由である。「今迄はかうだが私はかう云ふ」それは一寸云へない言葉である。釋迦が、親鸞が斯ういつた、だが私は斯う云ふ、それは普通の人間で一寸云へるものではない。詰りキリストは舊約聖書以上に自分の權威を主張せられた。之でなければ駄目である。吾々も他人にでなく、聖書にでなく、「私」に力を入れて發言出来る日が來なければ駄目で、パウロなごその點實に立派なものであつた。彼はテモテに「我に傲へ」と教へてゐる。

廿二節の兄弟を怒るものはいふ所に、古い譯には「故なくして」とあるがどうしてか新らしい譯には省かれてゐる。私は新しい譯に従つて置くことにする。佛教にも怒ることが不可ないことを屢々書いてゐるが、怒ることは自分に

も他人にも損である。怒は静かな氣持を保たうとする東洋的な思想の爲には特に禁物である。

分厘をも償はずば

汝もし供物を祭壇にさしぐる時、そこにて兄弟に怨まるゝ事あるを思ひ出さば、供物を祭壇の前に遣し置き、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然る後來りて、供物をさしげよ
(マタイ傳第五章廿三—廿四節)

イエスは決して禮拜を拒否せられる譯ではない。ユダヤには祭りが澤山あつた。然し小羊を祭つたわけでは何にもならないので、精神的に、根本的に神を祭る必要がある。それでイエスは祭壇の前に捧げ物の爲進んで行く途中、喧嘩してゐる人のあることを思ひ出したら、戻つて來いと云はれるのである。分厘までをも、つぐのはなければ神の國には這入れない。

ジョン・ラスキンといふ文明批評家があるが——私は此人の思想から感化を

受けたことが多い——彼はホイッスラーといふ日本の浮世繪を研究して印象的な畫を描く畫家を滅茶滅茶に批評した。ラスキンは自然派である爲に、突飛な竹を赤で描いたり、海ををかしな色に塗つたりするホイッスラーの繪を快よく思はなかつたのであらう。ホイッスラーはそれで、名譽毀損をしたといふので訴訟を起して一錢の賠償金を請求したが、ラスキンの負けとなつて彼は一錢を支拂はされたさうである。お互ひに、少しでも人を侮辱する場合には、警戒しなければならぬ。度を超えて、人をけなすことのない様に深甚の注意を要する。

東洋には大事の前には小事を犠牲にして何とも思はぬと云つた傾向があるがそれは不可ない。分厘をも償はなければ、其處を出ることは出来ない。樹の隅つこ迄も、一粒も残ることなしに、はつきり直角的にやらなければいけないといエスは懇切に教へられたのであつた。

性道德の完成

—第七誠の註釋—

「姦淫する勿れ」と云へることあるを汝等聞けり。されど我は汝らに告ぐ。すべて色情を懐きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり。(マタイ傳第五章廿七—廿八節)

第廿七節から第卅節迄は、十誠の中の第七誠「汝姦淫する勿れ」の新らしい註釋である。即ちキリスト教の新らしい出發點を明示したものであつて、古い譯では「女を見て色情を起すものは中心すでに姦淫したるなり」さなつてゐるのが、新らしい譯では「色情を懐きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり」となつて居り、新しい譯の方がはつきりしてゐて善い様である。

性の問題は、人間に執つて大事な問題である。食の問題は勿論大切であるが、それが個人の問題であるのに對して、性の問題は社會的に又は民族に關する事柄である。即ちパンは個人の問題であるけれども、性の問題は社會及び民

族の問題である。であるから個人的の事ならば多少我儘であつたにしても辛抱出来るであらうけれども、社會と民族に關係する性の問題に就いては絶対に我儘をすることが許されない。性の問題は何時も他人のことをも思ふ他愛的のものでなければならぬと同時に、子供を産むといふことをも考へねばならぬ、さうでない以上性の問題は亂れ易い。他人のことを思ひ、子孫を作ること考へないものは其處に大きな間違ひが起るものである。

イエス・キリストは此の性の問題を穢れたものとは見られなかつた。唯遊戯的氣分であることが悪い。性は生理的にのみ扱ふべきものではなくて我儘な考へ方をする事が不可ないと云はれるのである。それは、心理的に、更に子供を生んで社會を作ると云つたことを迄考へ置くことが大切であつて、色慾に戀愛が加はり、更に社會的に結婚するといつた三つの條件が整ふ必要があるのである。それで、その三つの中の一つ、色慾だけを以つて女を見るものは既に姦

淫したのと同じことだとキリストは云はれた。

然らば何故姦淫といふことが悪いであらう。理屈から云つて、好きな人と一絡になることが悪いといふ理由が解らないといふ人がある。殊に近頃は自由結婚論で持ち切りで實に無茶を云ふ人が多い。特に日本にはそれが多い様である。その人達は姦淫といつたことを何でもない様に考へる。フランスの道徳的廢頹も亦酷い様であつて、子孫を作ると云つた様なことを絶対に考へてゐないかの様である。自分だけのことを思つてゐるために、世の中が實に變なものになつて來てゐる。一体姦淫が何故悪いか。それは色慾、戀愛、結婚といつた三つの中の唯一つ、色慾といつた點からだけ云ふならば、別に問題では無いであらう。然し、自分の嘗つては愛して居たものを捨て、子供を捨て、我儘な自分の性慾のことだけを考へてゐることがどうして正しくあり得よう。三つの要素の二つを捨て、一つにつくことに姦淫の悪い原因がある。姦淫をすれば、

第一に困るのが妻であり子供である。然し、それも「社會がそれを平氣で許すから」と云つたことを理由とする人があれば、それはもう問題にならない。けれども善い種を子孫に残さうといつた努力を持つことなく、自分だけが感覺的に面白くやれば善いといふのであれば、自分に對しても、自分を信用してゐないことになつては居ないだらうか。人格とは、ズーとつゞいた傾向を持つものである。女の美しさは年と共に衰へる。否むしろ、朝と晩とでも違ふものである。怒つたら醜く、なる。美しければ美しいだけ、怒つた時の醜さも著しい、それを考へないで、甲の女から乙の女へ、乙から丙の女へと變つて行くことは明かに人格の分裂を意味する。それを考へずに、戀愛の自由を取り違へることは、大きな間違ひである。私は戀愛の自由を決して否定しはしない。結婚する迄に相手として好きな人を撰ぶ自由がないとは、私は決して云ふものではない。

人を造り給ひしもの、元始より之を男と女とに造り、而して「斯る故に人は父母を離れ、その妻

に合ひて、二人のもの一體となるべし」と云ひ給ひしを未だ讀まぬか。然れば、はや二人にはあらず、一體なり。この故に神の合せ給ひしものは人これを離すべからず。(マタイ傳十九章四―六節)

イエスは此處に神の合せ給ふたものは人が之を離すことが出来ないと言つて居られる。此の點を私は餘程面白いと思ふ。結婚は、父や母が結婚をするのではない。本人がするのであるから、本人が好きな人を撰ぶのは當然である。處が今迄の日本の破綻は本人に撰ばさなかつたことに原因することが多かつた。昔は家族と社會とが結婚をきめて仕舞つて、本人の考に重きを置かなかつた爲に、厭になつて仕舞ふことが少くなかつた。本人の知らない時代から親と親とで約束するといつたことが珍らしくなかつたのである。

キリストは其を此處で不可ぬと云はれるのであつて、夫婦は神が副はせ給ふものであるから父母が之を支配し得ないことを明かにせられたものである。本當の戀は、生理的だけでなく、心理的にも、更に子供のことも思ふたものであらねばならない。勿論其處に智慧以上の深い本能的の愛が加はることが必要

であつて、キリストもそれを否定されては居ないのであるが、外側だけで自由な生活をすることを誡められた。日本にも本當の戀愛が意識されたときに二十萬人からある醜業婦は後を絶つであらう。

もし右の眼なんちを潰かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり (マタイ傳第五章廿九節)

此處は若し生理的に我儘を云ふならば、欲望の原因を絶ち切れといふのであつて、紀元二世紀のオリゲンは文字通り此意味をとつて去勢した。聖書には、「若し」とかいてある。若し罪を犯すのだつたら切り棄てよと書いてあるのであつて、それも必らずしも肉體的に意味を取る必要は無いのである。マタイ傳十章十一節以下に「凡ての人この言葉を受け容るゝにはいらす、たゞ授けられたる者のみなり。それ生れながらの關人あり、人にせられたる關人あり、また天國の爲に自らなりたる關人あり、之を受け容るゝものは受け容るべし」と云つて

居られるが、之れは好んで關人になることも自由であると云ふのである。關人 Eunuche は、獨身で送ることであるが、イエスはさうしたい人はしても善い。自分自分好んでなる人、社會事業に貢獻する爲にさうする人、福音を傳へるためにさうする人、さういつた人は自由であると云ふのである。此等のことを考へて見て、私はイエスが常識の發達してゐた人であることをつくづく思はせられるものである。今日の産兒制限論は、人にせられたる關人を作る。中世紀は獨身でなければ聖人でないかの様に考へた。さうかと思へば最近では結婚しないものを憐れな不具者でもあるかの様な感を抱く。いづれにしても窮屈な考へ方が多いのであるが、イエスは結婚するのもよいし、せないのもよい。社會的に生理的に結婚せねばならぬ人はさうあれば好い。之に對するキリストの立場は極自由であつた。一寸もあせらない。ゆつくりして居られた。

私はどう考へても、イエスが間違をしない人であつたといふことを思は

せられる。極端な様だが、節制がある修道院に居る人から云へば世の中の人には救はれ難いものであり、世間から見れば、獨身者は不具者であるとするのが普通である。イエスは肉の生活をも汚れたものとしないと共に、單身で傳道する人にも尊敬をもつべきことを教へられた。

結婚制度と離婚問題

また妻を出すものは「離縁状を與ふべし」と云へることあり。されど我は汝らに告ぐ、淫行の故ならで其妻を出すものは、これに姦淫を行はしむるなり。また出されたる女を娶るものは、姦淫を行ふなり。
(マタイ傳第五章卅一―卅二節)

イエスの時代には我々が想像もつかない突飛な家族主義が行はれてゐた。即ちマタイ傳廿二章卅三節に出てゐる様に結婚する者は家族の爲に結婚せねばならなかつた。兄が死ねばその妻は弟が娶る義務があつた。斯うした極端な家族制度の嚴然として行はれて居る時代に、イエスの様な高い理想をお説きになつたことは、殆ど奇蹟であると云つて差支へない。結婚の歴史を見てみるに、有

史前に於ては群婚と云つた様なものが行はれてゐたのであつた。その目的は或民族の種を保存する爲に個性を殺して結婚することであつた。ユダヤに於ける家族制度の如きは、その變形したものであると云へよう。然しイエスは、眞の結婚が善き種を後世に残す使命を帶てゐる以上、現存せる社會制度より更に進んだものを作る爲に、性淘汰を経て新しい社會を創造すべきことを考へたのであつた。イエスが人は父母を離れて二人の者一體となるべし、と云はれたのは、明かに此の新しき出發を意味してゐる。従つてイエスは、古き時代の家族中心の結婚制度に反對して、個性中心の結婚制度を説かれたと考へて差支へないと思ふ。

家族制度中心の社會を考へたモーゼは、自由離婚を主張した。それに對してキリストはさうした不條理な離婚に反對して居られる。マルクス社會主義が盛になつて來てから、結婚を唯經濟的にのみ考へて、今日の家族制度は私有財産の

結成したものであり、妻は高尚な娼妓であるから、自由に離婚する権利を與へ、私有財産制度を破壊すると共に、女性を解放し、離婚の自由を認めればよいと主張するものが多くなつて來た。若しも多くの結婚が財産中心の結婚であるならば、マルクス社會主義の云ふ様にすることも必要であるかも知れない。然し性の問題はパンの問題以上にデリケートな感情が入つてゐる。其處には、身體の奥にある精神的結合が加はつてゐるから、唯單にパンと所有權の問題だけで片附けることは出来ない。共產主義の時代が來ても恐らくは、性の問題はそんなに簡單に解決は出来ないと思ふ。勿論、今日離婚に反對する者の多くは、子供の問題やその教育の處分問題が大いに影響してゐるから、子供を共產社會が引受けてくれるなら、自由に離婚しても善いやうなもの、子供が育つ事だけは確かであつても、人間の精神的發達が一層進歩すればする程、親子の關係はその愛を増し、生理的に心配する必要がなくなれば、こん度は心理的に心配

する度を加へて來るであらう。それであるから、パンの問題だけが保證されたからと云つて、親子の感情が鈍り、家族制度が直ちに崩壊してしまふなど云ふことを考へるのは全くの空想である。恐らくは社會が進歩すれば一層、遺傳學が發達し、親子の關係が明瞭に記憶せられ、種の保存が宜しく主張せられる様になるであらう。さうなつて來ると、所有權を中心とする家族制度よりか、心理的能力を中心とする家族制度が一層確立して來るであらう。従つて、異性を撰擇する場合でも、さうした深い思慮の籠つた撰擇が行はれて、一度び結婚した以上は離婚が出来ない様な家庭が生れるであらう。イエスの考へられた離婚なき社會と云ふのは全く斯うした家庭であつた。

自由戀愛と自由離婚とを主張する人達の間には、厭になれば合意の上で別れたがいゝ、と簡單に主張する者がある。若しも二人の間だけであるならば、そんなに簡單に片付けられるであらうが、子供を考へるならば離婚など云ふ事は

そんなに容易に考へらるべきものではない。「だって厭なものを自分を欺むいで、虚偽の生活も送れないぢやないか？」と云ふ人があるかも知れない。それ程虚偽の事が嫌ひな人が、何故子供を生むことを約束して結婚をするか。子を生まないといふ事を條件にして結婚をするなら、それは結婚でなくしてトルストイの云ふ體裁のよい姦淫である。即ち、色慾中心の結婚であつて、人類に對する大きな責任から結婚したのではない。それをしも考へないで結婚する様な者は、初めから離婚してゐるのも同じ事であつて、目的に對する何等の信頼を持つてゐない、性格分裂者であると言ひ得よう。

自個が自個に忠である以上、自分の一旦撰擇した者をそんなに屢々變更し得る道理が無い筈である。自個を信用しない者は、對手方をも信用しない。それであるから自我の十分生れてゐない者は、自由離婚を多く要求するであらうその人々は結婚を遊戯の様に考へてゐるのである。然し結婚と云ふものは、元

來が、自個の様なものを社會に多く作つて行く運動であるから、自個に對して信用の出来ない様な人達は結婚をする資格がないのである。自個の信用出来ない者は、白痴、發狂者の類であると云ふてよからう。従つて今日の様な病的時代に於て主張せられる自由戀愛は、私共が考へてゐる様な人格的自由戀愛ではなくして、肉慾的自由戀愛であり、我儘主義であり亂婚主義である。即ち自個が分裂しない以上さう度々離縁の出来る筈がない。亦姦淫が浸入して來る餘地もない。然し、人間は弱いから姦淫があるとして、その場合にのみキリストは離婚を許して居られる。

姦淫は自個分裂と我儘から起つて來る。勿論、社會制度に縛られた男女が、自個解放を主張して對手を撰ぶ場合に、それをしも姦淫とは云はないかも知れないが、自個の良心から出發して、一旦神の前に夫婦を契つた者が、中途にして他に對手を求める場合に、吾々はそれを姦淫と呼ぶ。それは、人間にとつて最

も悲しい一つの事實である。詰り結婚と云ふものは社會性を考へないですることには出来ないもので、自個のみを主張する者は永遠に結婚する資格の無い者である。異性を尊敬し、二人の間に生れた子供を尊重する所に、眞の結婚生活は可能である。然るに斷然、今迄尊敬してゐた異性を振り棄て、第二第三の者に向ふと云ふことは餘りにも、自個の作らんとする社會に對して踏み付けたやり方であると考へねばならぬ。それでイエスは姦淫を誡められたと共に離婚も誡められたのであつた。

ローマンチックな東洋に於ては、家族制度の結婚を極端に持つてゐて、病的な制度を生んでゐる。印度では赤ン坊の許婚が行はれ、女子の如きは許婚した男子が死ぬ場合は一生獨身で送らねばならぬ風習が今猶行はれてゐる。數年前印度政府の調査した所によると、印度に於て十才未滿で寡婦になつたものが十萬人を數へたと云ふことであつた。斯うした病的の社會制度は、離婚と云ふも

のが殆ど認められない社會である。然し、一面から見れば、さうした社會に於ては、女子と云ふものが、全く家族の奴隸として取扱はれる時代である。滿州などでもこれに類した制度が残つてゐるが、勿論吾々はかうした病的の制度に反對せねばならぬ。個性の生れてゐない者に結婚を強ひる者は、罪惡を犯させる様なものである。

人間の精神生活の基準が高まれば高まる程、個性が目醒めて來る。さうして個性の目醒めたものは一生の友として一人しか異性を愛することが出来ないだらう。即ち一夫一婦制度は結婚の歴史に於て最高の基準である。日本に於ては今猶、一夫多妻制度が行はれ、家庭に紛擾が絶えないものが多いが、如何なる共產社會が來ても、恐らくは一夫多妻の制度は認められないで、一夫一婦の制度が人間の心理的必要から定められたる基準として残るであらう。

日本に於ても明治廿年頃には、百組の結婚に對して、一年間に四十三組位の

離婚があつた。然し、今日は文化の進歩と共に、大正十一年頃には百組の中約十組位の離婚があることになつた。私は英國のその如く十二萬の結婚に對して一組と云つた様なよき率を示す様になることを祈る者である。否、絶対に結婚した者が離婚しない様な社會を日本にも早く造り出したものである。イエスは姦淫したものを離婚してもいゝと云はれたが、同情の深いイエスはヨハネ傳第八章を見ると、姦淫した女をすら許して居られる。その精神を汲んで紀元四世紀の聖者オーガスチンは、假令姦淫する妻があつても、それを許すのでなければ、眞のクリスチアンでないと云ふて居る。キリスト教は救はんとする愛の宗教であるから、其處にはかうした美しい精神が生れるのである。

虚偽の問題

―第九誠の完成―

また古の人に「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」と云へる、こゝあるを汝ら聞け

り。されど我は汝らに告ぐ、一切ちかふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。地を指して誓ふな、神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髮一筋だに白くし、又黒くし能はればなり。たと然り然り、否否といへ、之に過ぐるは惡より出づるなり。
(マタイ傳第五章卅三―卅七節)

此處で「誓ふ」といふことは、人間相互の約束の上に神の力を呼び寄せて誓ふことを意味する。創世記にはアブラハムとアビメレクとが誓を立てた如き例がある。

ベエルシバと云ふのは「契の井」と云ふ意味で今日猶その名が南パレステナに残つてゐる。古き時代に於ては色々な形で誓つたことが解る。イエス・キリストの此の言葉は、十誠中の第九誠「偽りて證を立つる勿れ」を押し擴めた教であつてユダヤ人には一にも二にも誓ふ習慣があつたのを戒められたものである。日本語には此の習慣が少いが英語には或は God tem 神が罰するとか Jesus Christ! と云つたことを呪ひの時に使ふ。下層階級の人々ほどそれが多

い。それはイギリスでもアメリカでも同じことである。ユダヤ人は此の傾向で語つた。自分の云ふことが直接神の聖旨であることを現す爲にかうしたことをしたが、イエス・キリストは、「神を引き出す様なことをしては不可ぬ。誓はぬ方が善い」と教へられた。「一切誓ふな、天を指して誓ふな」と云つて居られる勿論、約束するなど云ふのでは無い。時間的な社會契約全部を捨てよとも云はれない。イエス自身も「三日の後に去る」とか「後から行く」といつたことを約束して居られる。又廻りの朝、弟子達にガリラヤで逢ふことも約束して居られる。新約といふことからして已に大きな約束である。イエスの血が多く、罪を犯したものを爲に流される血であることの契約である。だからイエス・キリストは全然約束を否定した譯では無い。何でも彼でも神を引合ひに出して、人間の分限を越え、神迄をも卷添へにする間違つたことを警戒せられたのであつた。

此處に注意しなければならぬことが二つある。一つは吾々の約束に、絶対的の約束を神の名によつてしないことである。然し神に向つて約束を立てることは不必要では無い。即ち洗禮だとか、献身だとか云ふことは、神に向つての約束であるが、かうしたものをイエスは否定するのでは無い。約束を履行する場合に神を引出す様なことをせず、言葉短かに、然り然り、否々といつた簡単な言葉でせよといふことである。日本でも俠客の間では、利根川が逆倒に流れたらとか、富士が逆さに立つた時とかといふ言葉が使はれるが、イエスは出来るだけ短かく、然り否といつた明瞭なものにせよと教へられた。さうした時代が来れば、今の文明は遙かに簡單で要を得たものになるであらう。昔スバルタ人は、言葉短かにものを云ふことを一つの特徴とした。武士に「言は無。之は日本でも昔から云ふことである。これと丁度反對なのが「紺屋の明後日」であるが、吾々は飽迄眞理を守り、言葉少くなくに發表することを努力しなければな

らない。禪宗の言葉は非常に短かい。又イエス・キリストの言葉も短かくて要を得てゐる、イエスが病人を癒された場合には、殆んど命令的な短かいものが多かつた。「女よ起きよ」とか「ラザロよ出でよ」と云つた風である。「否」の部分にして「悪魔よ退け」とか「神を試むべからず」とか「パンのみにて生きず」とかいつた短かいものであつた。

之等に比べて中産階級の人々は實に言葉が長い。出来る、出来ないで簡単に事の足りるものを長々しいことを云ふ。之を、出来るだけ簡単な要を得た形のものにする方法を研究するならば、言語文化の上に貢献することが多いであらう。

階級制度が確立して来るほど言語が長くなつて来る。或者には長く、或者には短かくどいつた風に時間的に墮落して来た。目上には長く使ひ、目下には長く使はせる言葉の文明は虚偽の文明である。私は民主的の國民は然り然り、否々でやつて行けることを嬉しく思ふ。日本語ほど簡単に出来てゐるにも不拘す冗長な枕詞や、餘計な動詞につく助詞の多い言葉は無い。日本の労働者の間にある短かい強い言葉が一般に廣まり、確實な民主的な言葉が出来ると善いと思ふ。さうした然りと否との文明が眞實な文明である。昔から日本の商人は嘘を云ふものにきまつて居つた。特に符牒を二つも三つもつけて、人によつて、その値段を左右した。然り、然り、否々の文明では商人でも値段を一つにして信用のある文化を保持することが出来る。古から日本では、士農工商といつて、士が一番尊ばれ、商人が最も低いものとせられたのは、眞偽の上から考へられたものであらう。若し價を一つにした正札文明であるならば、符牒も愛想も要らない。日本の保險會社では、破約があればあるほど、會社の利益があるといふ組織であつて、それは全く胡麻化し文明である。それが相互保險となれば、破約してもそれを取り上げられることが無いから、然り、然り、否々の文明で

あり得る。今日の生命保険の如きも、破約が多いほど、儲けが多い。さう云つた人の弱點を基礎にして出来てゐる文明は、絶対に滅ばさなければならぬ。約束はお互のものである。であるから、人が約束を守れないとしても餘り責めないで許し合ふ良き世界を作りたいものである。ヤコブ書第四章十五節に『主の御意ならば、我ら生きて此のこと、或は彼のことをなさん』といふべきなり』とあるが、かう云つた氣持で、然りのうちに於いても、神の法則で生活して、自ら絶対性を立てない様に注意したいものである。かういつた美しい挨拶が西洋諸國に於いても、次第に少なくなつて行く模様である。即ち此の言葉を用ひて、『神若し許し給は』といつた氣持の言葉が少なくなつた。さういつたものが減つて行くことは、一面から云へば宗教文化の退歩である。私はイエスの云つたことが矢張り本當であるから、吾々も約束をする時には、絶対的のものこそせず變つても咎めない、相譲り、つぐない合ふ様なものにせねばならぬと思ふ。

第三章 完全なるものゝ姿

— 隣人愛への進出 —

二里の途

「目には目を、齒には齒を」といへることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ。惡しき者に抵抗ふな。人もし汝の右の頬を打たば左をも向けよ。なんぢを訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。人もし汝に一里ゆくことを強ひなば、共に二里行け。なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな。(マタイ傳第五章卅八—四十二節)

マタイ傳第五章の一節から四十八節迄の處は、申命記の教訓に對するイエス・キリストの訂正である。申命記には、目には目を、齒には齒をつぐなへといつた鬭争的な教訓がある。それに對して、イエス・キリストは、積極的な人を救ふといふ意志から出發した新道徳を提唱せられた。これは末節にある「汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」といつた言葉を念頭に置くのでなければ實行出来る文句ではない。即ち神の御經綸の中には弱いものをも救ふ

といふ意志がなくなりになる。又無法なものをも救はうとされる意志がある。それをも入れて此の部分を読まなければ到底解るものではない。之は悪をも救済せんとする新らしき道徳である。

仇討ちの心理では、親が殺された時には讐を殺すことをする。目をぬかれたら、眼をぬいてやる。それが昔の野蠻時代、鬭争的な時代に於いては當然の考であつたけれども、イエス・キリストに於いては悪人を善人にする運動であるから、其處に一つの轉換性を含むが故に悪人も見捨てやうとはしない。それは新らしい意味に於ける可變道徳である。同じく可變道徳にしても、古い時代のものは、人を殺しても止むを得ぬ場合ならば仕方が無いといつた様なものであるが、キリストは神の立場からどんな悪人も救はうといふのであるから、悪人も善人に變へ様とする努力をせられた。茲に云ふものは此の意味をも合した可變道徳であつて、一里の公役を強ひられたら二里行け、借らんとす

る者には與へよと云つた、餘程大きな精神の持主でなければ考へのつかない處のものである。即ち一里の道が遠い様に考へる人にとつては、二里行くことは頗る困難であるが、千万里を歩ける人には一里の倍は少しも困難では無い。イエス・キリストは、千万里を行く氣持で、無茶を云ふ人に對せよと云はれた。借らんとするものには與へよと云はれたのも等しい意味である。貸すときに、已に遣る積りでせよとイエスは云はれた。

私は此の中に五つの意味が含まれてゐると思ふ。

(1) 教育的意義 教育する爲には、刺戟を強くしてその人が他人に奉仕せねばならぬものであることを教へる爲に、必要以上に人の爲にも盡す部分を教へ込まなければならぬ。それには求められる以上に教へ、盡すことによつて、始めて人につくすべきことの教育が授けられる。例へば我儘な子供からパンを一切呉れと要求せられた場合に、二切を與へて一切をあなたの妹にやれといつた

とする。それは明らかに一つの教育であつて、二里の公役を喜んで勤め、借らんとして来たものに與へると云つた心持は之と同じ種類の氣持である。ローマの文明は我儘の點で嘗つて之迄に見ない利己的のものであつた。その國家に他愛心を教へるのには、極端とも見える社會奉仕の氣持を教へることによつて、利己的の愛から他愛的のものに轉換せしめて行くより方法がない。如何なる時でも、利己的文明から、他愛文明へ轉回せしめるには、かうした方向をとるより外に仕方がない。

(2) 有機的意義 一部にきずがあつた場合、それを償ふのには二倍の努力が要する。一里を一里だけ行つたのでは足りない。二里行つて不足を補ふだけの餘裕があるので無ければその傷口は癒されない。今迄にあつた部分が傷したのであるから、自分の存在に對する力と、他人の存在に對する力との二人分を出して傷の廣まらない様に防止しなければ、元の完全さに引返すことが出来ないから一

里の道を一里だけ行つたのでは駄目である。戦でくづれた部分をも償ふて行くだけの努力をしなければならぬ。

元來社會生活といふものが有機體なのであるから、借りたい氣持で居るものには、貸すよりも與へた方が根本理由に一致する。一里の公役を他人の爲だと思へば厭にもなるが、自分の爲だと思へば二里の道も何でも無い。主人の仕事だと思へば辛いことでも、自分の社會の爲だと思へば、それは結局自分の爲である。自分に歸つて來ることであるから、決して失つても悲しく無い。つまり社會が一つの有機組織であるから、一里の道を二里行つた處で損にはならない。損しないことを知つた時に喜んで二里行つて構はない。他人にやつた所でそれは自分の有機體の一部なのであるから、貸したものが返らなくつても損にはならぬ。

(3) 道德的意義 更に第三の點は道德的の意味であつて、道德の進歩から云ふ

と、人が一里の公役を強ひた時に、二里行くことを古い道德では非常な損失であるかの如くいふ。然しエマアソンが云つた様に、働らきそのものが自己に對する報酬であるといふことから考へても、一里の處を二里行くことは、自己を完全ならしめ、自己への報酬であり、それだけ自らを引き上げることである。又自己完成の上から考へても、奮發力が出るだけ善いと見なければならぬ。それではその力が出ない人間をどうすれば善いか。それが疑問であれば、もう一度考へなほすことが出来る。それは互助愛の意識の發達から生れるものであつて、それがなければ此の氣持は出て來ないものである。若し吾々の愛が根強く目さめて來れば、屹度吾々には借りに來たものに與へるだけの愛が發生する。兄弟であるとするれば、借りに來た時に與へるといふ氣持が自づから起つて來る。そしてマタイ傳第七章十二節にある「凡て人にせられんと思ふことは、人にも亦その如くせよ」所謂金則の氣持、自分の道德が創作的になつて、始めて他人を

も高め様とするやうになる。この意識が出來て來なければ、眞の善い道德は出來て來ない。一里の道を二里行く所に共產主義の道德が生れる。一里の半分を行つたのでは全然成り立たない。自分以上に他人が幸福である様にと考へて、始めて共產主義が可能であるものを、共に利を貪らうとする様なことでは、逆も不可能である。そんなことで資本主義制度は仆れない。

「己の欲する所を他人にも施せ！」それは誠に細胞分裂の作用である。他人にするのは、自分の延長にすることである。全部損をしたとしても、他人の爲になつてゐる。斯く意識的の道德にめさめるのでなければ、一里の道を二里行き、借らんとするものに與へるといふことが徹底して來なければ、眞の社會道德は絶對に無いと考へねばならない。

(4) 經濟的意義 一里の道を強ひられて、二里行き、借らんとする者に與へる氣持は、經濟上から見て、一つの投資である。「一粒の麥、地に落ちて死なずば

一つにてありなん」とある様に、多くの收穫を得る爲には最初のものを犠牲にせねばならぬことがある。此の犠牲が厭はれる社會は生命の經濟の世界に於ける失敗者であると考へて善い。吾々が喜んで眞の經濟の爲には、實を多く得る爲には、或瞬間の犠牲を忍ばなければならぬ。使徒パウロはピリピ書の第三章八節に「我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたる爲に凡ての事を損なりと思ひ、彼の爲に既に凡てのものを損せしが之を塵芥の如く思ふ。」と云つてゐる。一里の爲に二里行くことは、損の様であるが却つて、徳をする。二倍を與へることは損に見えるが、結局はこれが經濟である。生命の經濟の上では、多く得様とする者が始めに投資する必要がある。一里の道を二里行くのは、一つの投資である。借らんとする者に與へることも、亦一つの投資である。キリストは、その投資を教へた。それは生産的であるが故に何人も損をしない。

(5) 宗教的意義 最後に考へるのは、此の積極道の宗教的意義である。一里の道を二里行き、借らんとする者に與へることは、餘計な處で血を流す無駄骨折であるかの様に考へられ易い。人殺しを救つてみた所で効果は少い、利益となつて歸つて來ない、墓の中で腐つてゐても神の氣持の人は復活の試験をやつてみる。神の氣持の人はそれだけの暴挙をやる。一里の道を二里行き、借らんとする者に與へる氣持は、十字架を全く日常生活に引きなほしたものに他ならない。捨られた悪人をもくすの中から見出して、尊いものを生かして行く努力は人間として考へられる最大の貢献であり、完成への道、最高への道である。斯く考へることによつて、一里を餘計に歩くことは教育的の道であり、自己完成への道であり、愛を完全ならしめる道であると同時に、救はんとする意志を持つものが最後に發言せんとする、最も聖く、最も高い道徳的歩み方である。

神の如く爲らんとする意志

「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し汝等を責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり。天の父はその日を悪しき者のうへにも、善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬものにも降らせ給ふなり。なんぢら己を愛する者を愛するとも、何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや、兄弟にのみ挨拶すとも、何の勝ることかある。異邦人も然するにあらずや、然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ（マタイ傳第五章四十三—四十八節）

マタイ傳第五章四十四節は新らしい譯では「汝等の仇を愛し、汝等を責むる者の爲に祈れ」となつて居るが古い譯の方では「爾等の敵を愛しみ、汝等を誼ふ者を祝し、汝等を憎む者を善視し、虐待迫害もの、爲に祈禱せよ」となつて居て、此の方がキリストの心を盡してゐる様に思はれる。

第四十三節の「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝らきけり」とは意味深いキリストの教訓である。前の節からの續きであつて、一里の公役に、二里の道を行く氣持を更に深くして考へた處である。前

の部分では惡意を持つて臨んで居らないが、今度は惡意をもつて臨むものにしての注意である。申命記には「汝の敵を憎むべし」（申命記廿三章三一—六節）とあるが、キリストは一步進めて惡意を持つものに對する態度を示された。即ち新約聖書では敵をも愛せよ、その爲に祈れとマタイ傳第五章四十四節に教へられてゐるのである。但しこれは新らしい譯であるが、古い譯では、また色々な氣持を細しく書いてゐる。即ち敵を愛するに加へて、呪ふ者を祝し、敵の存在をも祝福し、又惡むものをも善く視、——その境遇事情等敵の立場になつて考へてやり、迫害する者の爲に祈禱し——自からが神の立場になつて善い方向に向ふ様に祈つて上げる、かういふ風に愛敵の精神と、神の立場に立つことは仲々出来ることでは無い。救はんとする意志は必らず此處から出發する。ドイツの哲學者オイツケンがその著「宗教の眞理」の中に云ふてゐる如く、敵を重んじると云つたことは、自我の生れたものでなければ出來ることでは無い。自己の長所

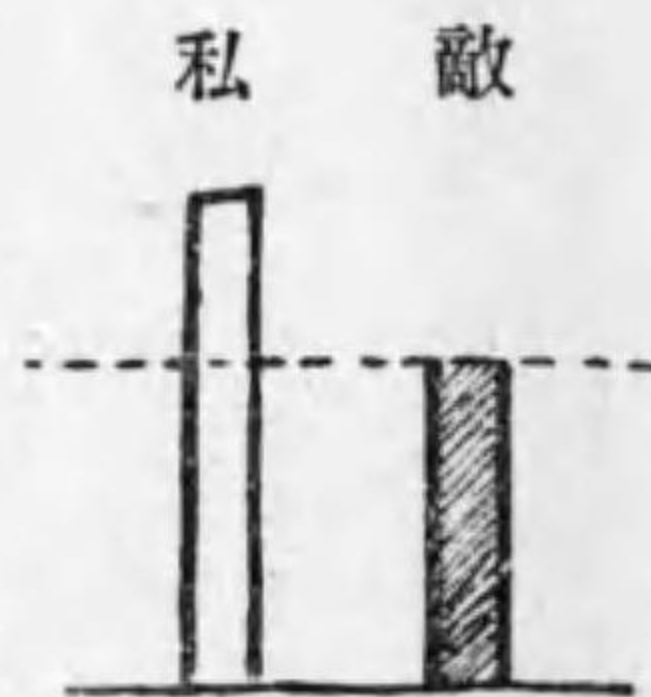
を知つたものゝみが他人の長所を認めることが出来る。他人の長所を認めるものは、それを尊敬することを知つてゐる。尊敬することを知らぬ人は愛する心を持つ。だから敵を愛する爲には先づ自分の長所を知ることである。之を知らなければ愛敵の精神など誕生するものではない。神は最もよく長所を知つてゐる。如何なる者をも自分迄引き上げ様とする最も強い愛敵の工夫を知つた方である。ベースボールは一人では遊べない。將棋もさうである。敵が弱くては、將棋にならぬ。使徒パウロは「正しきことの起る爲に異端起らざるべからず」と云つてゐるが、つまり彼は、自分に反するものをも神が置くことを考へる餘裕を持つてゐた。愛敵——害する者をも愛する工夫こそ、最高最後の道徳だ。

社會には進歩の程度の違ふものがある。進歩したものと舊式のものどが對立する様になつてゐる。國家の政治機關にも進歩黨と保守黨とがある。お互ひに尊敬し合ふのでなければ議會制度は出来ない。相手方を全部倒すといふ氣持が

ある間は、何時迄たつても良き政治のある可能は無い。議會制度は、愛敵の精神の具體化したものである。自分が追ひ込められても、敵を許して、寛容なる民衆中心主義になる所に議會制度の存在が可能である。それを、ムツソリーニの様に、レニンの様に反對者全部を餓滅し様とするならば、都合の善い所もあるが悪い所もある。反對する人は傑い人である。社會になくてならぬ人である。スペインは新教徒を殺した爲に文明が遅れた。フランスは舊教に反對するものを追つたゝめに革命が來た。反對者の存在を許すことによつて進歩に貢獻し得た例は決して少くない。反對者を尊び、敵を愛してこそ、奮發があり、改造のある善き社會が生れる。恰も電氣に兩極が、磁石に兩極があり、それあることによつてより各種の運動が起る様に、即ち少數派、敵を尊ぶ、それ等を立て、行く所に文明の高擧する道が存在する。イエス・キリストは少數派であつた爲に殺された。然しその死の瞬間にもイエスは敵を愛してゐる。「父よ彼等を

赦し給へ、その爲す所を知らざればなり」イエスの祈はかうであつた。パリサイ人や、サドカイ人の間に敵を愛するの精神があれば、イエスは十字架につかなくて済んだ。キリストは全く少数派滅亡の爲の犠牲になつた。

先にも云つた通り文明の進歩は、何時も、少数の犠牲者があつて、その後を民衆がついて行く。だから時代を導いて行く人は、何時もさうした目に逢はねばならぬ。忍耐と辛抱を持つ必要がある。それが呪ふ者を祝する氣持である。自分を迫害するからと云つて、却つて惡しむ立場をとるならば、導けるものは無い。之も前と同じ様に教育的な立場から見れば、自分が敵を亡ぼして仕舞ふなら、私の進歩は減らされる。然し若し自分を犠牲にして、敵を生かすといふことになれば、それが自分に迄昇つて來る力がある、自分だけ残つたのならば十しかないものも、敵と二つが有することによつて、十五の存在となり得る。敵の成長を見越し、愛し助けるのが、敵を愛する精神の原理である。



呪ふ者を祝し、憎くむものを善く視、責める者の爲に祈せよ。問題は敵が成長することを頭に置くことが肝要である。萎縮することを考へては、愛敵の工夫はあり得ない。教育的に、有機體的に、道徳的に、經濟的に、宗教的に此の態度をとることが眞の人間運動である。實際完全なる社會は、敵をも贖ふのでなければ出來ない。イエス・キリストは面白く雨の話を居られる。「天の父は雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり」(マタイ傳第五章四十五節)之は全く一視平等の氣持であつて、お前達も、その氣持でやれ。凡ての事が此の氣持で出發することが必要である。キリスト教に於ける最高の道徳は、此の愛敵の道である。マホメットは、敵を殺せといふ道徳を持つてゐる。佛教の日蓮宗にもさういつたことがある。キリスト教は、敵を愛して世界を征服して來た。然し新教がそれを移し忘れて反對の氣持に出たので、混亂に混亂を重ねた。

が、最初の程は、飽迄も柔和であつた。

東洋の墨子兼愛説の如き、田岡嶺雲氏は、之はキリスト教の思想であつて、支那にはかうした傾向のものは無い筈である云つて居る。此の墨子は、「自分の如く人をも愛せよ」といつた無我の愛を提唱するのであるが、之は全くキリスト教の思想である。他愛は神から出發するもの以外には不可能事である。墨子も亦さうであつて、その思想は、東洋のキリスト教そのまゝである。キリスト教の神は太陽を善きものゝ上にも、悪しき者の上にも昇らせ、雨を正しきものにも、正しからざる者にも降らせる。神を除いて、かうした奮發の出来るものはあり得ない。即ち他愛は、神を除いては成立しない。神は全體意識である。之を省いて、他愛心はあり得ない。今日迄、全體意識を除いたものは、皆亡んで仕舞つた。母が子供を愛する様に、人類全體の意識は、幼兒、小兒をも捨てないから、全體愛が其處には湧く。其處には所謂非戦争論か無抵抗愛が生れ

る。墨子は非戦争論を唱へた。それは東洋に於ける驚くべき議論であるが、初代キリスト教徒の非戦争論と少しも變つて居らない。キリストを中心とするものは、如何なる時でも、戦争に對する間違つた興奮を拒否する。初代の教會は戦争に従ふことを拒否した。今日の文明は又だん／＼非戦争主義を意識しつゝある。國際聯盟は全くその爲である。非戦争論は卑怯なものではない。強い者が團結して、悪を救はんとする眞の勇者が此の論者になり得る。或人は經濟上から、或人は社會運動の上から非戦争論を唱へる。けれども、眞の非戦争は、キリストの云つた最高の自覺が内側に生れるのでなければ成立しない。經濟的方面から非戦争を唱へる社會主義者の人々は、階級闘争に汲々としてゐるが、それは引いて戦争に迄導かれ、今のロシアは世界最大の軍隊を持つ國となつた。單なる經濟方面の立場からでは、安全な非戦争論は成り立たない。吾々は飽迄、純粹なる道徳的非戦争論の立場から、悪と悪をして妥協せしめないことが肝要で

ある。

生命は刻々全生命に關するものである。だから、目的の爲に、悪い手段を用ふることは、生命の成長の上から不可能である。此の意味に於いて、戦争論者も人を救はんとするキリストの意識に於いてのみ始めて非戦論の主張に變ずることが出来ると思ふ。

汝ら見られん爲に己が義を人の前に行はぬやうに心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。

さらば施濟をなすとき、偽善者が人に崇められんとて會堂や街にて偽すごとく、己が前にラツパを鳴らすな、誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是はその施濟の隠れん爲なり。然らば、隠れたるに見給ふ汝の父は報い給はん。(マタイ傳第六章一―四節)

此處は宗教上の施に就いての教訓である。今日も救濟の必要なことは誰しも知つてゐるが本當は全體意識から出發して居らない。表面的な個人的な見え坊からする人がある。それは昔も今も一寸も變らない。施濟は古代のユダヤ人

の間に發達して居つた。そのことは詩篇にも、箴言にも出てゐる。キリストも屢々施をせられたことが見えてゐる。

ある人々はユダが財産を預るによりて、「祭の爲に要する物を買へ」とイエスの言ひ給へるが、また貧しき者に何か施さしめ給ふならんと思へり。(ヨハネ傳第十三章二十九節)

之れはキリストが、不斷からして居られた施をさせる爲に、ユダに財布をあづけてあつたことを示してゐる。イエス・キリストは又富める青年にも凡てを賣つて貧しきものに與へることを命じて居られる。(ルカ傳第十八章二十二節)キリストも屢々施濟をせられた。然しユダヤの習慣としては、今日の日本にある民間佛教と同じ様に、宗教意識と一緒になつて、慈善の前に喇叭を吹いた。施濟をすることを一つの裝飾品の如くにしてゐたのである。あはれみはそれ自身が目的で、全體意識から出發し、隠れても、見えてもなすべきことで、さう云つたことに關係なくやるべきである。

日本にも隠徳といふことがある。吾々も此の隠徳を積みみたい。社會組織にも亦隠れたる部分に本當の強さを持たねばならぬ。人が知らうが、知るまいが盡すだけ盡さなければならぬ。

施濟の中でも、最も尊いのは、自分自らすることである。金でする場合に、人から搾取したものであることが多い。眞の施は身自らの奉仕であらねばならぬ。此部分が最も困難な點である。

施濟はキリスト教だけの特異なものではなくて、ローマにもあつたし、佛敎にも、神道の間にも施はあつた。キリストの云ふ施濟と、普通の施濟との差は、基礎にするかせぬかといふ點である。換言すれば、全體意識から出發するかしな
いかの問題である。全體意識から出發しないものは、道德上の誇を持たうとする。然し、全體意識から出るものは、已むを得ずしてするのであるから、知られ様が、知られまいがさういつたことに關係なくやつて行く。今日迄の世界傳

道の記録の如き、或は自ら進んで蕃人の生活を希望し、身を熱帯にさらした宣教師の如き、全く全體意識から出た神の如き仕事である。不思議にもキリスト教は、救濟の歴史に於いて光輝あるものを持つてゐる。歐州に於ける修道院の救濟事業は、實に世界に於ける愛の歴史の輝いた數章である。或ものはアルプスを超えて行く旅人の爲に休憩所を設け、橋なくして行路に悩む人々の爲には橋を架け、紀元二世紀にアレキサンドリアでベストが流行した時に、身を提して救つたキリスト信者の如き、ユーセピアスの信仰史中の最も美しい部分である。その他ユーセピアスの記録によればアレキサンドリアには十萬人位の信者で、一萬五千人の貧しい人達を世話してゐたと云ふ、不思議な救濟の歴史があつた。盲人に對する點字の發明の如き、近代の啞者をして語らしめる様になつた發明の如き、いづれもキリスト敎會から生れた、親切な工夫である。

第四章 神との對座

祈の本質

汝ら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顯さんとて、會堂や、大路の角に立ちて祈ることな好む。誠に汝らに告ぐ。かれらは既にその報を得たり。汝らは祈る時、己が部屋に入り、戸を閉ちて隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給ふなんぢの父は報い給はん。また祈る時、異邦人の如く、徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聽かれんと思ふなり。さらば彼らに效ふな。汝らの父は求めぬ先に、なんぢらの必要なものを知り給ふ。

(マタイ傳第六章五―八節)

第六章の五節から十六節迄は、祈に對する注意の個所である。キリストは此處に祈に就いて三つの(1)、場所、(2)、言葉、(3)、内容についての注意をして居られる。イエス・キリストは祈が精神的である爲に出来るだけ示威的な表面的な部分を省く様に注意された。示威的とは、大袈裟な方法で人に見える様にすることで、日本では術を使ふといふ意味で昔から松葉を燻べたり、法螺を吹いたりして、惡魔への示威運動をやつた。昔は随分そんなことをやつたもので、祈は主

として見せる爲のものであつた。

それに對してイエス・キリストは、祈るときは眞實に祈れ。人が居ても居なくても、それが部屋の中であつても、押入の中であつても眞劍に祈れと教へられた。すると或人は質問するであらう。公衆の前で祈るなど云うのであれば、教會の中で祈れないではないかと。祈は要するに唯その眞實さに關係する。眞實に祈れといふことを極端な個人主義的にとる必要は少しも無い。イエス・キリストは「我名によつて兩三人のものが集る所には我も亦その中にある」(マタイ傳十八章廿節)といつてゐられる。又ヨハネ傳を見るとイエス跪きて祈り給ふのである。イエスは他人の前で祈つたと信じてよい。キリストはごく自由主義者であつた。祈ることに就いて、洗禮者ヨハネは教へたがイエスは教へて居らぬ。

イエス或る所にて祈り居給ひしが、その終りし時、弟子の一人云ふ「主よヨハネの其の弟子に教へし如く、祈ることを我らに教へ給へ。」(ルカ傳第十一章一節)

イエスは祈の爲に特別の時間を持つて居られた。弟子達はその習慣を知つて居つたのでその濟んだ後に、「ごうかヨハネが祈を教へた様に、私共にも祈ることを教へて呉れ」と云つてゐる。然しイエス・キリストは、祈に對して自由主義者であつた。それで斯く祈れとは云つて居らない。只言葉に委せて、今日主の祈と呼ばれてゐるものを教へられた。之は唯一つ残つてゐるキリストが教へた祈であつて、多くの場合は放任主義であつた。然し之を見てもイエスは祈を個人主義的に考へないで、社會に通用性のある祈を考へてゐられたことが分る。祈は個人だけでは無く、民族にも、社會にも、世界にもある筈である、それに要求だけでなくて、讚美もある。個人だけでなしに、社會民族を中心とするものがある。善い筈である。然し、他人の爲に祈るので無く、吾々の爲に祈るのであることを意識しつゝ、公衆と共に祈る。即ち祭司の長のように、自分を捨て、置いて、他人の爲に祈ることは、キリスト教的では無い、民衆は自分の爲、自分

は民衆の爲といふのが眞の祈である。多くのキリスト教の團體に於いて、祈の力が弱いのは、團體としての祈を缺いてゐるからである。大抵公衆の前でも自分一人のことを祈る人があるが、團體として祈る時には又、團體の祈がある筈である。社會の生理的、心理的惡の問題に就いて、精神上的の惡に就いて、社會惡に就いて等、公の場所では公のことを祈るべきである、個人的な祈は、公衆の前に持ち出す必要は無い。公の席で、個人の問題を長々祈るから、祈禱會が厭になつて元氣を缺いたものになる。印度教の祈が、個人的なものばかりであつたのが、キリスト教を眞似て公衆の爲の祈にしてから、美しい祈禱となつて、印度教が生れ更つたといふことをきかせられてゐる。

要する所、祈は眞實にあるから、形式的な祈を排し様といふのがキリストの考であつた。ではキリストは食前で祈らなかつたか。四千人、五千人にパンを與へた時に、(ルカ傳九章十六節)パンをさいて祈り、エマオの途上に復活の姿

を弟子に現した日にも、パンをさいて祈つて居られる。(ルカ傳第廿四章卅節)であるからイエスは人ぎゝの良い様な祈はしない様にと注意されたのである。例へば、金持の病人を訪問して、その場に都合の善い祈をする様なことは駄目で、各自が密室で祈る時と同じ氣持、即ちヤコブ書第五章十六節にある「義人の祈は聞かれる」とある心持であらねばならぬ。詰り義しいものが心をこめて祈ると云ふのがイエス・キリストの本當の考であつた。

又キリストは繰返しを云ふなど云つて居られる。印度では、祈が一段形をかへて、念ずるといふことになつてゐる。祈は對象的であるが、念ずるとは、祈を主觀的にしたものである。「南無大師遍照金剛」「南無阿彌陀佛」「南無妙法蓮華經」と念ずることによつて、客觀的に對象が置かれなくとも、それ自身が一つの力であるといふのが大乘佛教又は印度思想の特徴である。念ずることには一種の自己催眠といつた分子がある爲に、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と

云う風に、繰返しがせられる。それは念ずることが絶對であると信じるからである。爲に一萬遍念佛を唱へたとか、一生の中に百萬遍唱へてから死ぬといつた風に繰返しが重ねられる。此の念佛の思想、それにも似た祈の繰返しは、神の豊かなる恩寵に對する無用なる仕業であるとキリストは考へた。單なる念佛は神を除けものにした、祈を巧利的に考へ過ぎたもので、自分が祈れば直ぐにきかれる、自分が佛になれる、思つた通りになる、といふのは悪く云へば信仰を亂用したものである。キリストはさう云つた繰返しで無く、祈が成長せねばならぬことを教へた。キリストは極く自由の人であつたから、決して型に入つた祈をせぬ様にと注意せられた。

繰返しは、人間が迷つた時に起る。興奮すると人間はよく廻旋状態を現はして、同じことを繰り返す。同じところをクルクル舞はる。さういつた廻旋的のことをしないで、マツシグラに神の方に行くことをキリストは教へた。キ

リストは云はれてゐる「汝の願ふ先に、天の父は知つて居られるのだ。故に繰返しを云ふ必要は無いらぬ」と。(マタイ傳第六章七節)

處が或人は此の求めぬ先に知り給ふとあるのを極端にとつて、祈る必要が無いのではないかと云ふ。佛教のある人々は、祈をするのが間違ひで、「心だに眞の道に叶ひなば、祈らずとも神や守らん」と云つた、心持を非常に尊重して、神が守つて呉れるならワザ／＼神に注意する様な文句を使つて祈る必要が無いではないかと云ふ。然し、祈と云ふのは、人間本位の祈だけではなくて、神の榮光を現す爲のものも多くあり得る。神が人類を成長する様に作つた以上、要求を通じて、神の榮は現はれるものである。

キリストは「求めよ、さらば與へられ、門を叩けよ、されば開かれん」と云つて、要求が即ち完成への出發點であることを云つた。従つて、求めぬ先から神が知つてゐるから、求める必要はないとキリストは教へたのでは無い。

例へば肥料をやるにしても、成長の時期にする。神が人間に肥料をおやりになるにしても、或所まで伸びて來ぬものに對してまで、おやりにはなれぬ。神に向つて伸び上つてゐるか、どうかは、神のバロメーターで知るより他に無い。神には神の様な要求がおりになるから、それに近い祈をする者ほど、神はその祈に對して肥料を與へて下さると考へて好い。祈は、神に向つて成長せんとする一つの意識的な働きである。發狂者は自分のしてゐることを意識してゐない。意識してゐる様になれば、もう發狂してゐるのではない。祈を意識し、自分の惡かつたことを懺悔し、告白し、神に對する自分の立場を意識して、要求する者は、正氣に歸ることである。狂的狀態から神に向ふ良心を取り戻すことである。神がきくといふ祈は、發狂狀態から本心に立歸つた状態にあるべきもの、祈と考へて善い。だから私共は、よく／＼自分が自己に立つてゐるかを自覺して、神の榮の一部をなしつつあるものであることを意識しつつ、祈ることが大切

である。かく祈ることによつて、神の分限を迄犯すといふことになりはしない。神は吾々が要求することをも亦要求してゐらるゝ。

豫言者エレミヤが嘗つて獄屋に居た時に神から聲がかゝつた。「汝われに呼び求めよわれ汝に答へん」(エレミヤ記、第卅三章第三節)、祈の要求が神から來てゐる。即ち神の求めたまふ者は、吾々の祈である。黙示録には、神に捧ぐる香ばしき香は祈である。「此の香は聖徒の祈禱なり」(黙示録第五章八節)とあつて、聖徒の祈が煙となつて天に昇り神の前に捧げられることが書かれてゐる。神の要求したもふもの、中に人間の祈がある。神は吾々祈らざるを得ぬことを知る。従て吾々は成長のある祈を神に捧げなければならぬ。それは天に飛んで行く様な祈であれ。地から成長して、天に高く、潔く、神への捧げ物としての最も善き祈をせよ。善き祈は、神との交通に於ける最善の香である。それは人格的接觸である。人間に最も幸福な時は父と子との關係、妻と夫との關係、

即ち、生理的にも、心理的にも、凡てに結ばれて、讚美と感謝と要求と、あらゆる觀察が相一致する所に靈の藝術が存在する。即ち歌が祈となり、祈が歌となる所に、宗教に於ける最高の喜びがある。

書はエホバその憐憫をほどこし給ふ、夜はその歌われと共にあり、此うたは、わがいのちの神に捧ぐる祈なり。(詩篇第四十二篇八節)

祈は迷信であるか？

反キリスト主義者が笑ふのはいつも「祈」といふことに就いてである。私は最近太陽に「青年に與ふ」といふ論文を書いたが、共産主義の佐野學氏は「賀川氏の説は餘り坊主臭い。あれはブルジョアの哲學だ」と八月(一九二七年)の太陽の中に書いて超越の神を信することは間違だと述べて居る。同氏は七月の改造に「マルクス無神論の歪曲」といふのを書いて無神論でなければマルクス共産主義で無いことを説明せんとして居る。之等の説は現在では相當男子専門學校の學生の間な

ぎには、随分廣まつてゐる。従つて社會運動と云へば宗教を馬鹿にする傾向があるのであつて、そのとき二千年、四千年とさかのぼつて「祈」ということを云ふのは物珍らしい響を人々に與へる。然し、私は祈といふことを此處で餘り理屈つぽく論じたくは無い。さう云ふと「お前は一体理性といふものをどう見るのか」と云はれるであらうけれども、私は祈といふものを人間的事實としての立場から見たいのである。最近獨逸に起つた一つの傾向に「祈」を民族心理の事實として見るといふ見方がある。人は皆祈をする。祈をしないといふ人は多いにしても、日本の神社、佛閣が祈を意味してゐることに氣附かすには居れないであらう。已むを得ぬ氣持が込み上げて來て、祈らざるを得ぬ氣持になる。それが祈である。それは恰も吾々が意識をしないけれども絶えず呼吸してゐると同じ様に、意識をしないけれども腸が蠕動をしてゐる様に、吾々は宇宙に居られる神に呼吸する。祈とは神を呼吸することに他ならない。その氣持の解らない

人には祈は詰らない。民族でも個人でも世界的になつたもので、祈を持たなかつたものは無い。何故祈るか云へば、祈らざるを得ないから祈つたのである。子供が日毎に大きくなる。何故大きくなると叱つても矢張り大きくなつて行く様に、それは理屈では解らない。凡てのことが理屈だけで解るならば生きてゐるのも理屈だけで明瞭になるであらうか。呼吸してゐることも、生きてゐることも理屈はあとからくつゝけたので、事實が先きに存在した。吾々は空氣の中に酸素と窒素の二つのあることを知つてから呼吸を始めたのではない。知らないうちに呼吸をやつて居たら、後から空氣の中には酸素と窒素があることを學んだのである。空氣中に火事が起つても、燃えない様に窒素があるのだといつた理屈は、後の後につけたものにしか過ぎない。吾々が意識し様がしまいが或力を感じる。此の領域は神秘である。神秘にも種類があるが私は生命の神秘、實行的な倫理的な神秘といつたものを信する傾向を持つ。私は、普通マルクスの唯

物論の人達が「自然だ、あたり前だ」と見てる處に自然の不思議を發見する。一体どうして、かうした微妙な世界が生れたのであらう。それに慾望といったものが植えつけられた、私は此の不思議な世界に据ゑられて、事毎に感謝と、要求と讚美をする習慣が生え上つて來た。此の不思議な存在があたり前であるならば、現在のロシアに詩人など全然要りはない。

何故花が美しい？ それが葉から進化したものであるためだけではない。炭素、酸素、水素、窒素其他何々といった原素の結合による爲のみでも無い。其處に花自身としての美しくならうとする努力のあつたことを忘れてはならぬ。私はスコットの植物の進化を讀んでその努力を教へられた。植物が開花植物になる迄の努力は一通りでは無い。植物も目的と要求とによつてこゝに迄到達した。私はそれを信ずる。私は植物にも一つの祈のあることを信ずる。その祈を希臘の哲學者アリストートルはエンテレキーと云つた。Entelechyとは内側から

外側へ要求を持つて行くことである。あらゆるものに、美しくならうとする慾望がある。それは目的をきめるし、善くならうといふ理想を植えつける。若しそれが單なる利己的な要求で無くて全体に關するものであり、全体から出發したのであるが故に、間違つて居らないといふことが信じられた時に、宇宙全体に關する神と、自分の要求との間に少しも矛盾が無くなり、祈る方が當然であり善いと云ふ氣になつてくる。否祈らざるを得なくなつて來る。斯うした祈は神に對しての捧げ物であり、發達進歩を祈ることは神の要求に應じ奉ることである。詩篇第四十二篇八節には「此のうたは、我が生命の神に捧ぐる祈なり」とあつて、涙をもて歌ふ歌が一つの祈であると書いてある。またかうした生命全体の祈は、最も美はしき神への焼香でもある。さうした言葉がよく默示録に使はれてゐる。かゝる祈は神の前に迄昇る美はしき煙として天に迄昇つて行く。即ち祈を持つ我々自體が神への捧げ物である。吾々が神に捧げるものには色々あら

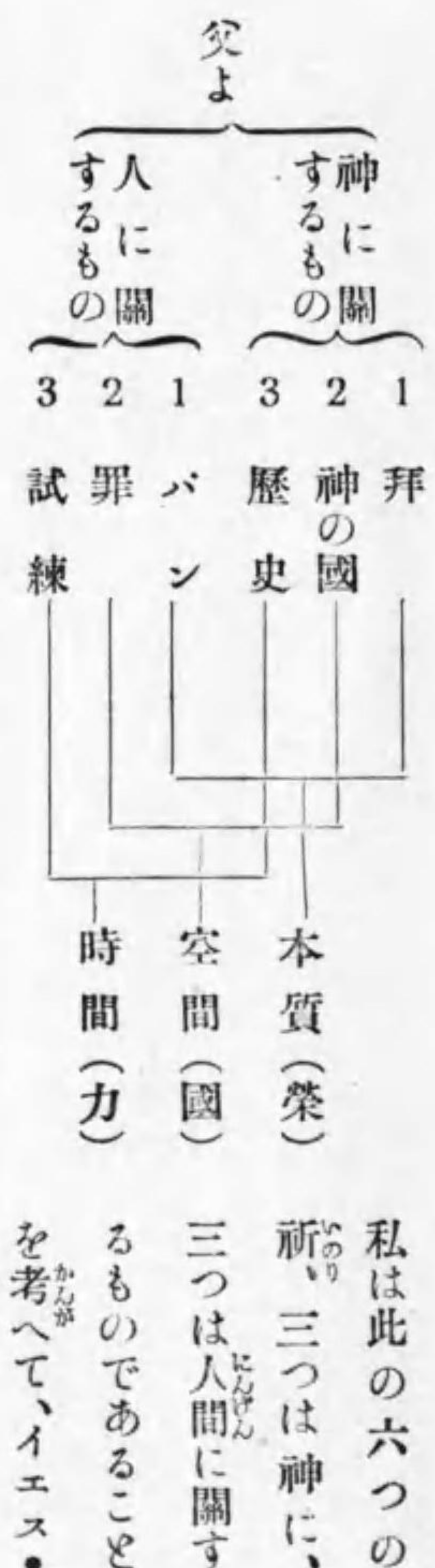
う。然し、祈と、祈の泌み込んだ生命を捧げる以上のことは無い。その祈が若し汚
ない自分の快樂の爲であるならば駄目であるから知れないけれども、宇宙全体
の爲であり、神の國の爲であるならば、それが受け入れられない理由はない。
きかれないのが不思議であつて、もつと祈れと云つた要求がある筈である。

「神が祈れと云はれる？」さう聞きたゞす人があるであらう。然り、私はさ
う信ずる。エレミヤ記にも「エレミヤよ、もう少し祈れ」との神の命令があつ
たことが出てゐる。是は矛盾の様であるけれども、エレミヤの場合など決して
然うでは無い。吾々はどうかすると祈は利己的な自分のことの様考へるが、
神は吾々に水鐵砲の水の如くに祈れと仰せられる。

世の中の水準を高める爲には祈の他には何物もない。祈ほど詩的であり、合
理的なものはありません。祈は生活そのものを活躍せしめる。さればこそイエ
スは聰明な考でもつて祈を吾々に教へた。イエスの教へた祈は

天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められんことを。御國の來らんことを、御意の天の
ごとく、地にも行はれんことを。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。我らに負債ある者を我ら
の免したる如く、我らの負債をも免し給へ。我らを試に遇せず惡より救ひ出したまへ
(マタイ傳第六章九—十三節)

であつて何でも無い様であるが考へれば考へる程實に深い、尊い殆んど人生
の全部に亘る祈である。



キリストがわざ／＼斯うした合理的な祈をなされる積りであつたかどうかは解
らないけれども、それが理屈に適つてゐることを思はせられる。

第一は神に關する祈である。神を神と云はずに「父よ」といふことから始めた。或人は宗教は對立をもうける間はまだ駄目であるといふ。佛教では特にそれを云ふのであつて、吾々それ自身が全体の一部なのであるから、吾々が佛になれば善いのだと主張する。誠にそれは、理屈らしい云ひ分であるけれども事實はそれとは違ふ。人間が純正に神の一部であるならば、罪などは無い筈であるが、人間は自分を顧みて随分恥かしい所がある。時によつては偽を云ふし、恥かしいこともする。全体の一部ではあるが、凡らゆる知慧と力とを持つものに比べて誠に足りないものである。その全体を統べるものに對してすら、神と云ふ嚴めしい言葉でなしに、「父」といつた言葉が許されるならばそれは缺點多い人間にとつてどれだけ嬉しいことであらう。私は敢て「全体」と云ふ言葉を使ふ。唯物論者がよく全体といふからである。有限、無限、全体と云つた様なことは冷たい感じを與へる。イエス・キリストは、此の宇宙全体を造つた神

が情ある父だと教へて呉れた。それは理屈抜きである。子供は父の家を辱しめまいとする。それはなすべきことであり、喜びである。私は此處から出た拜むといふことは、祈の根本義であり、合掌瞑目して凡てを神に委かせる氣持であると思ふ。之を新約聖書では「み榮」と云つてゐる。み榮とは何を意味するか？宇宙全体が神の藝術であることを發見することである。私はこの問題に就いて、人間の顔のことを考へる。顔の真中に何故鼻があるか。そんなことを迄考へてゐられる方は少いであらうけれども、私は貧民窟に棲んで居た關係上、鼻を失くした人間の醜さを随分見せられて來た。鼻の上にある眼球は二つとも動く。下にある口も動く。その間にある動かぬ鼻が無いとするならば、顔面は全く小川の流を見る様なもので、さぞしまりの無いことであらう。だから神は鼻を真中に動かさない様に上手に置いた。上が動き、下が動く間に、美しい無限曲線の動かぬ鼻の据えられてゐることは、何と云つても優れた藝術品である。そ

の工夫に面白味がある。それを御榮とはいふのである。鼻が無くても呼吸は出来る。それを附けたのは一つの裝飾ではあるが、必要でもあつたのである。賀川と云つた人一人位は生きても死んでも善いのであるが、或意味で必要があつたから生れ出て来た。こんなに不景氣ならば死んで仕舞つた方が可いといふことも云へるであらうけれども、必要があればこそ生かされて来てゐるのだ。かういつた風に、各自が神からの必要を要求せられてゐることは、神の榮光の爲である。拜むが爲である。どんなものでも、五年十年と持つて居れば、その間に自分が浸み込んで行く。私の子供が自分の箸と他人の箸とを區別してそれを混同しないのみか、間違つた時には取り合ひをする。それは箸を自分の指先の延長の様に思つてゐるからである。人間一人も神から見れば、何でも無いものに違ひない。太平洋に漂ふ塵埃にも等しいかもしれぬ。然し、神としては五年、十年と直いてゐられる間に、なくては淋しいものになつて来て居る。一見

必要がないと見られる藝術的なものであつたにしても、必要があつて地上の生活を許されたのである。であるから、神の云はれる通り、拜む氣持で行くことが大切である。拜む氣持をば神聖とはいふ、部分と部分の關係は愛の姿に現はされ、部分から全体に向ふ氣持は神聖といふ言葉に現はされる。之等の經驗を祈のうちにも持ち續ける。それは何といふ幸なことであらう。貧乏をし様が誤解せられ様が、手を合はせて神に歸る時に、貧乏も苦痛も、悩みもすつくり掃き取られる。此の拜むこと即ち敬虔を失つた人間ほど淋しいものは無い。さればこそこの敬虔の運動に教會が、神學が、哲學が心を寄せて來つゝあるのであつて、最近は特にその拜むといふ氣持に歸りたいといふ運動が鬱勃として姿を現して來てゐる。私は歐州に於ける、殊にスイス、西南獨逸に於ける哲學が神をよう否定し得ないのは、拜むといふ部分を除去し得ないが爲であると考へてゐる。

神の國運動

第二の祈は神の國を求むる祈である。從來どうかすると個人が拜む氣持であれば善いといつた風に考へられた。然しイエス・キリストは「み國を來らせ給へ」と祈ることを教へて居られる。宗教が一つの社會性を帯びてゐることを疑つてはならない。吾々はイエスの運動が、神の國運動であつたことを記憶する必要がある。一代で成就しなかつたら五十代百代を経て成就させ様とするのが神の國運動である。

今日の教會の祈に就いて僅か云はせてくれるならば、祈の題目があまりに小さ過ぎはしないかと云ふことである。今會堂へと歩みつゝあるものを省みて一刻も早く「此處に來させ給へ」といふ祈が捧げられて、一向神の國を要求する様な大きな祈がせられて居らぬ。小さい祈も結構ではある。然し眞劍になつた場

合に、捧べき餘りに多くの祈が殘されてゐることに氣附かぬのはどうしたのか。四萬の炭坑婦人勞働者を解放するのは誰であらう。彼女は、炭坑深く一里、一里半の奥に作業をする。ダイナマイトに一寸の變動があれば、坑内の全部が死なねばならぬ、殘された家族の苦しみは云ふ迄も無い。日本には猶四割九分の農民がありその七割は小作人である。彼等は雨に困り、日照りに困る。十七萬七千からある醜業婦の悲歎は云ふ迄もない。之等の解放は誰がするか？ 何故その爲に祈らないか？ 眞劍な祈は、民族の爲に、神の國の爲に祈る祈である。イエス・キリストは「盲者は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しきものは福音をきかせらる。凡そ我爲に蹟かぬ者は幸なり。」(マタイ傳十一章五―六節)と云つて主よ主よといふものが必ずしも神の國に入らないことを云つて居られる。旅人を懇にし、裸なるものに着せ、監獄に檢束された人に水を汲む者が我が弟子であるといエスは云はれた。我が爲に

蹟かぬ者は幸だとは、その意味であつて、勞働運動や農民運動をすることは、非宗教的であるといふ人があるが、イエスは盲目が見、跛者が立ち、癩病人が潔められ、死人を甦らす運動即ち、高い死亡率を低下させることが、農民の地位を高めることが、神の意に適ふことを教へられた。我等はその事の爲に祈る必要がある。吾々の中に明治維新のクリスチャンの努力が保持せられてゐるであらうか。米國の奴隸解放運動者ガリソン、ジョン・ブラウンの運動は當時の教會から誤解をうけた。ヘンリー・ワード・ビーチャーでさへ彼を誤解したではないか。神の國運動を餘り狭く考へないで、虐げられた娼妓の爲に、漁夫の爲に、水夫の爲に、不具者、病人といつた小さい人々の爲に祈ることが、祈そのものが存在しなければならぬ理由である。

日本で最も良く祈つた人の一人は石井十次氏であらう。よくもあれだけ祈れるものだと思ふ程彼は祈つた。彼が祈つた部屋の一隅だけは疊が著しく引き

込んでゐた。石井十次氏は旅行をせられる時に、何時も三年分の日誌を所持して行かれた。そして毎朝前日の日誌を記すときに、過去二ケ年の祈の内容を顧みて、それが聞かれてゐるかどうかを瞑想し、感謝せられたと云ふことである。此の氣持は他人の爲に働らき、神の國の爲に動く人でなければ解らない。祈がなく存在した大運動は一つとして無いのであつて、最近の印度に於ける國民運動が支那のそれとは違ふといふのも、全く宗教的であるか無いかに原因してゐる。印度に於けるブラーマ・サマーヂといふ運動は、ウイリヤム・ケリーの感化によつて起つたものである。これ迄のブラマ教といふのは、念じはしたが祈をしなかつた。それにキリスト教から、純粹な祈の精神が這入つて行つて、ブラマ教の人達も、一緒に祈る様になつた。聖哲タゴールの運動がそれであつて、ガンジの運動も此處から流れ出た。ガンジは毎朝午前四時に起きて、バガバッドギータを讀み且つ祈るさうである。タゴールも午前

に起きて祈る。印度は暑さが劇しい爲に、こんなに早く起きて、もう一度やすみ、日を二分して使ふことになつてゐるのであるが、さうした事は別問題としても、兎に角、印度の國民運動は祈によつて始められた。リンコルンが奴隸解放の前夜、夜通し祈つたといふのは米國史を飾る最も美しいものゝ一つではないか。自分の爲でなく、民族の爲の事業は祈なくしては起らない。明治の御代に二人の神につける政治家があつた。その一は片岡健吉氏であり、一人は島田三郎氏であつた。私は最近片岡健吉氏の傳記を借りて來て寫してゐるが、非常に感心したことは、あらゆる時に祈のあつたことである。彼は十數年間議長の席にあつたが、議會を始める時には、祈をしなければ席に就かなかつた。此の事を考へて、私は祈が何の迷信であらうと叫ぶ。森に山に、祈に苦心する人は大きな事業を眼の前に控えた人である。

パンと苦難に就いて

第三の祈は攝理についてである。「聖旨の天になる如く地にも成らせ給へ」神の國の爲に祈ることが空間的であるならば、攝理の問題は時間的に、歴史的にあなたの心持が視はれる様にといふ祈である。第四の日用の糧を與へ給へと云つた祈は貧乏な經驗をしたものでなければ解らない。私は今から十九年前の二月の廿四日に神戸の葺合新川に移つたが、十五圓で家を借りて生活し様とする私に一人の失業した労働者がその晩にたよつて來られた。三日目にもう一人殖えた。一週間して又一人頼つて來た。結局十五圓で四人が生活しなければならなくなつたので、粥を焚いて、それを一日に二度食ふことにした。それからズーと經つて或人から五十圓貰つたので三月目に普通の飯を食つた。その甘かつたことを未だに忘れることが出來ぬ。私はその後四年八ヶ月米國に行つて苦

學をしたが試験前になると學資が無くなつた。それで何時もしたことは、牛乳とシユレットツド麥とで朝晝晩、朝晝晩を過した。苦學してゐた間毎年二週間は斷食の積りでかうして過した。實に簡單明瞭な生活で、そのとき日用の糧を今日も與へ給へといつた祈をつくつく考へた。そして神は不思議に斯く祈るものに與へ給ふた。本當に飢えたものでなければ、此祈は無。祈らずに居ても腹が一杯な人からは祈の方から逃げ去つて行く。食べさせるものが無くてパンを借りに行けば、寢て居ても起きて貸す（ルカ傳十一章參照）かう云つた話が深なしに讀まれるであらうか。米を一升借りに行つた經驗のあるものでなければこの氣持は解り難い。米を一升買ふことの恥かしさに自分の金で米を買ふことを恥かしかつて、米屋の前を歩きつ戻りつしたものに、日用の糧を今日も與へ給へといふ祈が湧く。私は二錢で炭を、五厘で御かずを買ひに行く時に此祈が湧いた。さうしたことは貧民窟ではありふれたことである。今日四人が食

べられる様には心から祈らざるを得ない私の祈であつた。

第五は、自分が他人の缺點を赦す様に自分の罪をも赦して呉れといふ祈であり、第六は誘惑から、苦難から私を援けて下さいといふ祈である。英譯では誘惑 Temptation となつてゐるがシユワイチエル博士は寧ろ苦難と譯した方が善いと云つて居られる。苦難から誘惑が来る故に、苦難の爲に誘惑を感じるといつた方が善いと云ふのである。然しその差は唯時間的問題に過ぎない。

私は此の六つの祈それは、(1)神に對しては禮拜を、(2)人間に對してはパンを、(3)神に就いては、神の國を、(4)人間に就いては罪の赦しを、(5)神の攝理を、(6)人間を苦難より救ふことを求むる心持であるが、恐らく吾々の祈る凡てのことが、この孰れにか這入るのでは無からうか。お金が無くて祈る、それは第四の祈になる。一般道徳の向上に、社會改造の爲に神に要求する。それは大部分第二の祈に這入つて来る。

斯くイエス・キリストの祈は最も合理的なものであつて、斯うした祈を、しない人の方がどうかしてゐる。私はよく、軍人であり、政治家であつたゼネラル・ゴルドンのことを思ふ。彼は今から百年前に、支那で有名な洪秀全の長髮賊を僅か五百人の兵士で征服した。後、彼は埃及に行つて、カッスムで戦死を遂げたが、彼は戦の間に何時も祈つた。彼のテントにハンカチが掲げられてゐる時は、彼が祈りつゝある時であつた。殊に戦に利が無くなりかゝつた時に、彼の祈は續くのであつた。之にも均しいことを吾々はジョン・リビングストンの傳記に見る。彼は八十數歳で熱帯の藁小屋に死んだ。アフリカの藁小屋に只一人妻に、子供に死に別れて、黒奴の僕に介抱せられつゝ此の世を去つた。或朝のこと、彼の祈が長い爲に、僕がのぞいて見たがまだ彼は祈つて居た。然し餘りに出て來ないので、ごうしたのだらうかと扉をねぢ明けて入つてみると彼は祈の姿のまゝで既に父の處に歸つて行つてゐた。私は斯うした美しい魂の

祈が迷信であるとはごうしても考へられ無い。
 私は一昨年（一九二五年）英國に行つた時に第一に訪問したのは、ウエストミンスターアベールであつた。勿論拜みたいからである。私はウエストミンスターアベールの丁度真中にあるリビングストンの墓を見て感激を禁じ得なかつた。私にはその上が歩けなかつた。十九世紀に機械文明が魂の世界を荒した時に、黒奴解放の爲に一生を捧げた彼を追想したからであつた。吾々の魂が神に捕はれて祈る様になるならば日本は必らず變つて來る。山室軍平氏の活版棚の裏の祈が兎にも角にも日本にあの救世軍を生み出したのでは無いか。祈の靈が一人を捕へる時に日本が變つて來る。それが果して迷信であらうか？ 祈が浸み込まなければ、日本は引き上げられない。神はエレミヤに祈を要求せられた如く、吾々にも祈ることを要求して居られることを忘れたくない。

第五章 野の百合の凝視

宗教訓練と禁慾

なんぢら斷食するさき、偽善者の如く、悲しき面容をすな。彼らは斷食することを人に顯さん
 きて、その顔色を害ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。なんぢは斷食するこ
 き、頭に油を塗り、顔を洗へ。これ斷食することの人に顯れずして、隠れたるに在す汝の父にあ
 らはれん爲なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。(マタイ傳第六章十六―十八節)

斷食が何時頃から、一つの宗教訓練の要素になつたかは詳でないが、東洋
 では昔から行はれて居つた。日本でも現在猶、成田の不動には斷食堂があり、
 其他にもある。眞言宗の中には又斷食がある。

恐らく之が最初の出發點は生理的必要から起つたものであらう。舊約聖書に
 はダビデ王が愛兒を失つた時に斷食をした記録があるから、矢張り古くから宗
 教的意味を持つた斷食があつたと考へて善い。初代教會には、一週間に二日斷食

のあつた記録がある。その後のキリストの教會のうちにも斷食の様式があつた。
 マホメット教では、一年間に四十日間斷食の日がある。然しそれは絶對にする
 ので無く、日没からは食べても善いのである。だからしやすい。恐らくそれは
 イエス・キリストが四十日斷食せられたことから來たものではなからうか？ 西
 洋には斷食の専門家が居て街のまん中に硝子箱を拵へ、此人は何十日斷食して
 むると書き出して寄附金を募集してゐる。

私は矢張り斷食が生理的に力を持つことを信する方である、胃腸の悪い人々
 は斷食した方が恢復の爲に遙かに効が多い。斷食は水を呑むことは妨げない。水
 だけは續けて飲む。斷食療法といふのは、恐らく最も合理的な療法として残つ
 て行くであらう。

斷食が宗教的意味を持つと云ふのは、禁欲の意味から來たものと見える。實
 際斷食することによつて、或期間の間、非常に明晰なる頭腦を持つことが出來

る。断食をすると、始めには脂肪を失ひ、次に筋肉に病状を起し、最後に神経が犯されるのであるが、神経を犯される迄には数十日かゝるから、其間人間の頭脳は明晰になる。或る時には、歡喜をさへ抱くと云ふことを、私は断食した人から聞いてゐる。私自身も亦、生理的の必要上断食を屢々したのであるが、私其効果を認めて居る。印度の尊者ガンヂーは、何時も断食して國民の罪を神に詫びるといふ態度をとる人である。

唯吾々が注意しなければならぬことは、活動したいものにまつて、断食は丁度正反對の立場にあることである。吾々が静止の時は断食しても善いが活動するときは断食してはならない。否一層多く食物をとらなければならぬ。それは生理的理由から來た當然のことであつて、日本の食物史から考へて見ても、徳川時代の中葉迄二食で來たものが、三食する様になつた。それは單なる營養の爲ではなくて、寧ろ食へることを樂しむと云つた爲であつたことも考へねば

ならぬと思ふ。吾々が營養の爲に食をとらないで、味覺を樂しませる爲に食物をとる時は、思はざる病氣に罹ることがある、此の意味から或禁慾的方向をとることは大切なことであつて、肉や酒を絶つと云つたことも、充分或生理的意味を持つてゐる。それが何時となしに生理的原因から離れて、宗教的意味を持つ様になり、神を喜ばせる爲に断食するといふことになつた。キリストはその宗教運動を開始せらるゝ前に四十日間断食せられたけれども、公の生活に這入つてからは、断食に餘り重きを置かぬ様にせられた。即ち、公の三年間の生活には断食された記録が一度も無い。寧ろ

「新郎の友だち、新郎と偕になる間は、悲しむとこを得んや。されど新郎をさらるゝ日きたらん、その時には断食せん」 (マタイ傳九章十五節)

と云つてゐられる。反つてヨハネの弟子達やバリサイ人の様に、規則的に断食しなくて善いと教へてゐられた、之を見てもイエスの宗教生活は、當時のバリサ

イ人の宗教生活とは違つて居つた。彼等は断食する時、懺悔と祈禱を現はす爲に顔をも洗はずに、他人に見て貰ふためわざ／＼汚くして、神殿の廻りをウロツイテゐた。エルサレムに居たヨセといふ人がそうした生活をしてゐたことがタルムツドに記されてゐる。イエス・キリストは、さういつた形式では断食も何の意味も無い。だから断食するときには頭に油を塗り、顔を洗つて綺麗にせよと云つてゐる。即ちイエス・キリストは断食が絶対に不必要であるとは考へられなかつた。唯断食を或形式で宗教訓練の中にすぐその儘入れて仕舞ふことに賛成せられなかつた。實際活動を續けて、理想社會の實現を謀るものにとつては、断食を宗教訓練の中に入れても善い。断食を普遍的に要求することは無理である。

然し先きにも述べた通り、生理的、心理的要求からすることにイエスは決して反對せられ無い。然し或ひは生理的必要から、心理的必要から之をする場合にも

決してわざとらしくなくしたいものである。麗々しく人々に發表して断食する必要はないと思ふ。キリストはさうした目に立つことを慎んだら良いと云つて居られた。即ち、餘りに宗教的關係を持たさないで、他人の爲よりも自分の爲に断食する。さうしたことなら外側に發表してすることも差支えないであらう。キリストはよく、見らるゝ爲に断食するなど云つて居られる、之は断食のことを發表する時にも注意を要することである。

私は放漫な食事の執り方をするよりも、断食の間に挿しはさんだ生理的節制のある生活の方が愉快であると思ふものである。ピユリタンの時代には、日曜日にはパンを焼かなかつたし肉も食はなかつた。簡単な、その日を辛らうじて支えるだけの營養で満足した。そして凡ての者が喜んで禮拜に出られる様にしてゐたなど、云ふのは、一面實に愉快な生活である。

餘りに放漫な、餘りに感官的な、食糧攝取法は、人間には不幸である。日本

に於ても、禪宗の僧侶が極く簡単な生活の中に幸福を發見してゐることを考へて、絶對的の斷食で無くとも、或程度の禁欲的的食物攝取法を日常生活の糧とした方が、より愉快な生活が出来ることを信ずる。

搾取なき世界

— 第八誠と第十誠の完成 —

なんぢら己がために財寶を地に積むな、こゝは蟲と錆とが損ひ、盗人らがちて盗むなり。なんぢら己が爲に財寶を天に積み、かこは蟲と錆とが損はず、盗人らがちて盗まぬなり。なんぢの財寶のある所には、なんぢの心もあるべし。身の燈火は目なり。この故に汝の目たゞしくば、全身あかるからん。然れど、なんぢの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかにかりぞや。人は二人の主に兼事ふること能はず。或はこれを憎み、かれを愛し、或はこれに親しみ、かれを輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼事ふること能はず、この故に我汝んぢらに告ぐ。何を食ひ、何を飲、と生命のことを思ひ煩ひ、何を着んと體のこゝを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや、空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに、汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遙に優るゝ者ならずや。汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。又何ゆえに衣のこゝを思ひ煩ふや、野の百合は如何にして育つかを思へ。勞せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ。榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及がざりき。今日ありて、明日、爐に投げ入れらるゝ野の草をも、神は

かく装ひ給へば、まして汝らをや、あゝ信仰うすき者よ、さらば何を食ひ何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふな。是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれ等のものゝ汝らに必要なるを知り給ふなり。まづ神の國と、神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は、汝らに加へらるべし。この故に明日のこゝを思ひ煩ふな、明日は、明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。(マタイ傳第六章十九—廿四節)

此處はルカ傳では第十二章の廿七節のあたりになつて居る。恐らくは之を話された時は丁度四月の花盛りの時であつたらう。美しい百合が野に咲いてゐたユダヤの百合はアネモネである。秋に上州草津の桔梗ヶ原に桔梗が咲く様に野原一面美しく彩られた時であつたらう。イエスが斜面の傍に立つて弟子達に語るときに美しい紫や、赤色のアネモネが、ガリラヤの自然に、何とも云へぬ美しさを増し加えてゐたであらう。

イエスは先づ十誠の第八誠と第十誠とを一緒にして其處で教へられた。「盗むな」といふのと「貪るな」といふ財産に關する誠である。

イエスの時代の王といふのは類の無い貪慾なもので、皆金錢に墮落して居つ

た。ヘロデ大王の如き、ダビテの墓をあばいて、中にある金を取り出したと云ふ位の人である。ローマでは又、寶の山が積み上げられて、皆が金錢の奴隸になつた時である。その時イエスは此の美しい詩の様な言葉を吐かれた。即ち地上の寶が何の意味も無いことを先づ教へられて、地上の寶で生命の買へないことを、吾々に強く説いた。

之は又マルクス主義の唯物的社會主義者が陥る欠點である。唯物的社會主義は一面非常に立派ではあるけれども、資本主義が持つたと同じ種類の欠點を持つことによつて、人類解放の原理からは遙かに離れてゐる。成程境遇は人間を作るであらう。その影響は大であらう。然し、それだけで人間が負けて仕舞ふものならば、人間の記録といふものは全然入用がない。

イエスは此處に價值に三重の階段をもうけられた。それは(1)、生命(2)、身體(3)、衣食住の三階段である。物質上の價值といふのは交換の可能にその基を置く

交換の可能から金錢を重んじることが始まるが、交換といふのもつまるところ人間の智慧から出發する。金貨は更に紙幣と、手形となり、遂には約束だけでも善いことになる。つまり、人間の價值は外側よりも寧ろ内側に屬するものである。キリストはそれを眼の話でせられた。眼は光が無ければ役立たない。又光だけあつても人間に之を受け入れる仕組みがないならば役立たぬ。眼を通つて光が這入つて来て初めて役に立つのである。吾々に價值の出来るのも亦之と同じ關係で、いくら外側にダイヤモンドや黄金があつても、それを欲しないならば、何等の意義も無い。即ち光が見える爲には、眼を澄み切らせる必要がある。吾々は利益を中心とする經濟を成さうと思へば、心といふものをうんと發達させなければ伸び上れぬ。故にイエス・キリストは、心を中心とする協力が出来、社會正義と愛との社會を作ることが出来れば、他は自づからついて來ることを云つてゐる。即ちイエスは、「神の國と正しきとを求めよさらば之等の

ものは加えられる」と云つてゐる。

此の爲に、最も美しい二つの詩が物語られた。それは空の鳥を見よ、野の百合を見よ！の美しい二つの詩である。實際鳥の生活は考へると、世界に鳥ほど幸なものは無いと思はせられる。鳥の世界には生存競争が少い。猛鳥もあるけれども、鷲とか鷹とか隼とかで、四足獣に比べて非常に少い。殊に鳥の様な雑食のもの、生活に一寸も困らない。海に、山に、野に到る處食物がある。鶴は卵を一度に二つしか生まないが、それで種族保存が出来て行く。キリストが鳥を指して、その生活振りに學ぶ所が多いことを示されたのは誠に最もなことである。鳥の様な生活をするなら、吾々は恐らく餘り困らぬと思ふ。鳥等でも、夏と冬とでは居る場所を代へてゐる。夏は北方に去り、冬は南方に歸るといつた様な、避寒、避暑の豊かな生活振を示し、食物を廣い世界に涉つて、悠然と飛び歩く。

イエス又野の百合を指して、それに學べと云はれた。之は日本の様な美しい百合ではなくて、アネモネの一種であらう。日本にある百合は世界でも珍らしいので、各國に輸出せられる。そのアネモネに就いて考へてみても、その美しさは、王侯貴族の着物に劣らない。私は植物の花の進化を研究してみても、それが如何に不思議なものであるかを思はせられる。不思議に植物は美しい装をして着飾つてゐる。殊に植物は花が咲く様になつてから到る處に蕃殖する様になつた。最も進歩した菊の如き、あらゆる處に咲く力を持つてゐる。實際花を咲かせてゐる植物は、海にも山にも水の中にも花を咲かせてゐる。それは生活難を越えて、美しく着かざつてゐる。

だから吾々鳥や花のことを思へば、それ以上尊く作られた人間が思ひ煩ふ譯が無い。若し思ひ煩ふ理由がありとすれば、お互に生存競争し、食ひ荒らし、寄生蟲的に他人を墮落させることの方が却つて人間の生活を困難なら

しめてゐる理であると吾々は考へる。食糧問題を研究したラッセル・スミス氏は云つてゐる。「人間が肉を食はず、穀物で満足するならば、熱帯地方の田を開墾すれば、地球は猶數倍の人間を養ふ力がある。却つて相戦ふ爲に人間の濫費する方が大きい。戦争に使ふ金を食糧を作る爲に、熱帯を開墾する爲に使用するならば、さう人間は困らない筈である」と。實際歐洲戦争に際しては、四年八ヶ月の間に千二百萬の人を殺し、三千七百億圓を使つた。それだけを開墾の爲に使ふならば生活不安といふこと等は全く無くて済んだかも知れぬ。だからイエス・キリストが、神の國とその正しきを求めよと云はれたことは眞理である。吾々は生活の問題に悩む必要はない。日本に於ても酒と放蕩とに使ふ金を節約すれば一年間に二十六億圓以上の金が節約される。それで、日本人全体の食ふ米は僅か二十四億圓なのであるから、酒と放蕩とをやめれば二倍の人口になつても大丈夫である。かういふ風に考へると、一日の苦勞は一日

で足りる。明日は明日それ自身が思ひ患ふであらうといふ言葉は、中々大きな眞理を持つものであることを發見する。明日は明日だけでない。此時は此時で、此瞬間は此瞬間で最上の努力をすれば善い。もし突きつめて考へれば、此瞬間を至上のものと考へて、目的の爲に方便を考へない、方便主義に陥らずに、即ち此の瞬間を無駄使ひしないで、ぼんやり暮さないで送ることは、生命の本質の上から重要なことである。

生命には、目的と手段とが刻々に同一内容を備へてやつて来る。それは恰も繩梯子を昇る様なものである。その一つをはずすことは、瞬間を無駄にするのみではなくて、却つて低きに墮ちる。であるから吾々は平和の爲には戦争をも辭さぬといつた様な、或は又、共産主義擴張の爲には掠奪も亦必要だと云つた様な、今日と明日との生活方針が異なる様なことでは、充實した生命の發展は期せられない。故に吾々は、その瞬間、時間、時日、その日、その日の生活

を最も大切な、最も尊きものとして、送らなければならぬ。
 私は斯うした一日主義の生活こそ人生に於ける最大の藝術家が歩むべき至高の道であると思ふものである。平凡な、日々苦勞をし、苦勞の日に猶安靜を保ち得る、その境地こそ宗教生活に於ける極致であると思ふ。

第六章 社會生活の黄金律

イエス語録

第七章は、第五章などの様に統一的になつて居らない。断片的であつて、ルカ傳を見ると最後の「家の譬」は、第六章の話にくつゝいてゐるが他の部分はバラ／＼に話された様である。恐らくイエスは屢々断片的に話されたのであらう。近世の批評家はマタイ傳第七章は何度にも話されたものを蒐めたのであると云つてゐるが、私もさう考へて善いと思ふ。例へばマタイ傳第七章七節にある「求めよ、さらば與へられん。」の文句はルカ傳第十一章の第九節にある。即ちマタイ傳第七章は、批評家の間に云はれてゐるロギア—イエスの語録といつたものを参考して、イエスが一度に云はれたものでないものを適當に配列した模様である。だから之をイエスが山上で全部を云はれたとすれば、續けてせられた

ものではなく、ぼつり／＼話されたものであらう。

世評の榭目

なんぢら人を審くは、審かれざらん爲なり。己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量にて己も量らるべし。何ゆに兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか。視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかいて、汝の目より塵をさり除かせよと云ひ得んや。偽善者よ、まづ己が目より梁木をさり除け、さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

(マタイ傳第七章一―六節)

マタイ傳第七章一節から六節迄は、十誠にない部分で、人を批評する氣持に就いてのイエスの教訓である。人に對する批評に就いても、イエスはマタイ傳第五章に於ける一里の道を強ひられた時に二里行くといった主義で、非常に優れた教訓をして居られる。それは主の祈のうちの第五の祈、「吾等に罪を犯すものを吾等の許すごとく我等の罪をも許し給へ」といつた工合で、他人の欠點を批判してはならないと云つて居られる。聖オーガスチンは何時でも弟子を教へ

る時にテーブルの上に銀の鉢を置き、その上にマタイ傳第七章の一節から六節迄の意味を書いて置いたといふことである。吾々の悲しい氣持は人を低く見積ることによつて、自分が高くあることの意味を持たうとすることである。善いことが平凡に見え、悪いことが異常に見える、此の心理は新聞の記事に最もよく現はされてゐる。世の中には悪いことばかりでないのに、日々の三面記事は、悪いことで一杯である。然し實際は、他人を低く評價することによつて、自分の屬する社會それ自身が低いものであることを意識しなければならぬ。自分を全体に屬するものであり、自分がそんなに低い處に屬することは、自分が善くすることに對する責任を果してゐないことを認めなければならぬ。管仲が最も嚴格な刑法を支那に作り自分がその法律に最初かゝつて死刑になつたことは有名な話である。他人を仆すものは、自分も仆される。他人をそしめるものは、自分もそしられるといふことに、氣の付かぬ人は誠に氣の毒であ

る。日本に於ける禪の修養は一面に就いて優れたものであるが他人を馬鹿にする點では、世界の修養法中でも變質的と見て差支えない。自分だけが豪いとする所謂、野狐禪の本質——天地の中で豪いのは自分一人だといふ氣持、天上天下唯我獨尊、それでなくとも、自分だけが豫言者で他は皆愚衆であると云つた考へ方は、英雄主義的であるかも知れないけれども、さういふ氣分では眞のデモクラシーを齎らすことは出来ない。眞のデモクラシーは他人を尊敬する所から始まる。他人の意見が時によると自分の意見よりも優れることを思ふことによつてその議會が成立する。工業に於いて分業が成立する如く、思想にも分業が成立するのであつて、凡ての人を馬鹿であると考へた時は、民衆によつて持ち來らされる神聖なる文化といふもの、成立の仕様がなくなる。此の意味でイエスは「己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量にて己も量らるべし」(マタイ傳第七章二節)と云はれた。

第三節の「何ゆえ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか」に就いて、あるが、恐らくイエスは、子供の遊戯から之を思ひつかれたものであらうと思ふ、よくマツチの軸を上臉と下臉との間に入れて。子供同志で笑ひ合つてゐるが、かうした類の遊戯、滑稽をイエスは更に誇張して梁木と云はれた。即ち他人の欠陥は埃でも見えるが、自分の眼窩に梁木のあること、梁木の張つてあることを無視するのは、間違ひでは無いかと注意して居られる。人間の視力は、直ぐに外部に向つて適應して來るものであつて、カリホルニヤ大學の心理學の教授が鏡を用ひて対象全部が逆倒に見える様にしかけ、それを數日眼鏡の様に用ゐさせた所が僅か十數日のうちに、初め逆倒に見えたのが、普通に見える様になり、歩行に聊かも困難を感じなくなつた。元來人間の眼は凡て映像が逆倒になつて映る筈であるが、吾々は一向それを感じない。眞すぐに見えてゐる。この様に人間は悪因襲に對しても、ちきなれて仕舞ふ。自分の眼に梁木があつて

も、他を觀察するのには自分の何の差支へもない様に見て仕舞ふことが多い。であるから吾々はよく注意しないと、實に妙なことになるのである。日本人が最初西洋人を見た時に、色の白いのを見て「白つ子」だと批評したり、又毛の異つてるのを見て毛唐人だと云つた。自分の鼻の低いことに氣がつかないで彼等の鼻の高いのを笑つたりした様なことは、世間知らずの吾々の間に善くあることである。神風連の人々が電氣や、電信を使ふことは野蠻だと云つて、その使用を禁じた如き、ガリレオの地動説を罵つた法王が遂に彼を死刑に至らしめたるが如き、其他今日多くの異端者征伐、或は左右翼の運動に對する各種の極端なる批難の如き、多くは全く自分の立場を明瞭に意識せぬことから起つてゐるのであつて、餘程注意をしないと吾々は大間違ひをする。

若し吾々が聖パウロの云ふ様に、正しいことの現れる爲に正しからざること現れざるべからず、といふ氣持で居るならば、決して間違ひは無い。我々は常

他人の意見に對しても寛容でなくてはならぬ。

「畜生！」の問題

聖なる物を犬に與ふな、また直球を豚の前に投ぐな。恐くは足にて踏みつけ、向き反りて汝らを噛み破らん (マタイ傳第七章六節)

此の意味は全く以上の意味を本質的に考へた譬であつて、吾々が犬を畜生とか馬鹿と罵る時に、果して畜生であり馬鹿であるのならば批難を加えて見た處で仕様がなから、そんなつまらぬことを爲ない方が善い。批難しても解ると思ふ所に自分の馬鹿さがあるのだから、そんな矛盾することをするな、といエスは注意されたのであつた。

求めて與へらるゝ世界

求めよ、然らば與へられん。尋ねよきらば見出さん、門を叩け、さらば開かれん。すべて求むる者は得、たづぬる者は見出し、門を叩く者は開かるゝなり。汝等のうち、誰かその子パンを求

めん石を與へ、魚を求めんに蛇を與へんや。然らば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや

(マタイ傳第七章七十一節)

七節以下は更に違つた格言であつて、イエスが要求の原理を細しく吾々に説明せられた所である。之は一つの進行曲であつて、一人の人が或ものを求める爲に人を尋ねて行く。そして門を叩いて後戸が開かれる。凡て求めなければ與へられないとイエスは云つて居られるのであつて。私は之を非常に深い宇宙的原理であると考へてゐる。哲學者カントは合目的(テレオロジー)に重きを置いたが私は此のイエスの言葉によつて、内側から湧く要求、それを自分で作つて要求して行くことが生物界に於ける大きな原理であると思ふ。即ち、生物にとつて、宇宙の間に秘められた大目的は解らないが、或目的を實現せねばならぬと云ふ尊い或原則のあることを考へねばならぬ。即ち凡ての生物はその運命を自分自ら決定すると云つて善い。佛蘭西の豫言者と云はれるロマン・ローラン

は運命に就いて「運命とは自分の意志を放棄する所にある」と云つてゐる。即ち彼の言葉に従へば自分の要求することを捨て、物理的、生理的支配に委かされた時に運命がその勢力を逞しうするといふのであつて、自由といふのは要求する處に始めて誕生する。要求せぬ所に自由は無い。混沌たる世界を見つめると不思議に要求のある處には生理的素質をまでも變更してゐることを發見する。木の葉の形にならうとする蝶は、周囲の色彩と全く見分けのつかぬ様に、自ら色素を分泌して、己が身を適合せしめ得て居り、吾々がどうにもならぬと思つてゐる生理的法則すら、殆んど決定的だと考へられる生理的機關を征服してゐるのを發見すると、欲求といふことが、もう一度考へられる。従つて、目的論(テレオロジー)に對して、要求論(アイテオロジー)が考へられる。アイトスとはもどめるといふ希臘語である。私は宇宙を貫くアイテオロジーの原理に、宇宙進化の不思議なるものが秘められてゐることを思ふ。アリストートルは、

此の無意識的な部分を、エンテレキーと名づけた。有名な哲學者ドリユーシユはアイテオロジのエンテレキーを採用した。私はアイテオロジのエンテレキーの様に、無意識的な合目的運動を考へないで意識的の要求運動をより深く考へたい。祈の原理は全く此處にある。凡て生物の欲求の原理はエンテレキーとアイテオロジの一直線上に置かれてゐるものと考へる。即ち子供がパンを求めらば、親は之にパンを與へる。子供が乳を求めるとき、母の懷には乳房が用意せられてゐる。人類の要求する所に、不思議に神が要求に答へられる様な仕組みに宇宙はなつてゐる。男が異性を尋ねる心持、其處には必らず女性が待つて居る。神は口と食物とを別々に作つたが、本能の發達する所に必らず或物が作つてある。それを吾々はぼんやり考へてはならぬ。第十一節に、「まして天にいます汝らの父は、求むるものに善きものを賜はざらんや」と結論してゐるのは全くかうしたことをイエスが意識せられて居たからだと思ふ。

は思ふ。

黄 金 律

然らば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、豫言者なり。

(マタイ傳第七章十二節)

第十二節は世に所謂金則 (Golden rule) と云はれる有名な格言である。孔子は「汝の欲せざる所を人に施す勿れ」と云つて居られる。それでスマイルス氏の如きは之を比較して、イエスの教訓を金則、孔子の格言を銀則だと云つて、キリストの言葉を激賞するのである。然し之はキリストだけの言葉ではなくて、孟子の中にも發見せられる言葉である。唯キリストの金則は神を背景とした金則である。その金則は「天にゐます汝らの父は、求むるものに善きものを賜はざらんや」の父を背景にした金則である。無限の父を背景にしないならば、或所で行き詰る。何故ならば吾々人間が要求することを絶対に満足させることが

出来ないからである。孟子の書いた他愛主義は、何處かで行き詰る。然しキリストの他愛主義が道徳に終らずに大きな理想主義として残るのは、宇宙を貫く神を中心にした他愛主義であるからである。

即ち他人を愛し様と思つて、神に求めるならば必らず愛し得る。人を愛する愛が、神から流れ出ることを原則とした金則である。此の意味に於いての金則は孟子の中には無い。墨子の兼愛説がキリスト教的であるといふのは天を基礎にしてゐるからであつて、實際生存競争説に對して、他愛的原理を説かうとしても宇宙本質の中に愛の進化が認められず、互助の法則と、生物の生存の蔭にかくれた玄妙な宇宙意志の法則とが認められぬとするならば、吾々は生存競争の學説を打破する強い原理を持つとは云へない。然し、吾々は、宇宙を貫く神の保護の原理と、相互扶助の原理とを見ると共に、更に要求することが、或程度迄叶ふものであることを原則として、信じられるならば、吾々は此の金則を守ること

がさう困難でなくなつて来る。不思議にも人間進化の歴史は、此の金則への人間成長史である。電話、郵便物、郵便制度の確立、各種の交通機關、各種の經濟制度の如きは、單に我儘なものだけが阻止することの出来ない社會である。それは未だ「凡て人にせられんと思ふことは、人にも亦その如くせよ」といふ原則が凡て行はれる社會ではないが、漸次その方向に進みつゝある形態であることを認めざるを得ない。共產主義者、アナキストの原理は、此の金則を實際政治に應用しようといふのであるが、唯不幸にしてその手段が之と遠ざかつてゐることを悲しまざるを得ない。

イエス・キリストが此の金則を、社會律法の根本原理であり、社會進化の根本原理であると云はれたのは尤である。即ち、意識的に、凡ての個人が社會全体を貫く、或原理を意識し、他をも自分の様に愛し得らるならば、社會律法が無用となり、文明批評家としての豫言者も必要が無くなると云つて善い。

第七章 人生表現と人生効果

狭き門より入れ、滅亡にいたる門は大きく、その路は廣く、之より入るもの多し。生命にいたる門は狭くその路は細く、之を見出すもの少し。(マタイ傳第七章十三、十四節)

第七章の十三節以下は譬喩の多い部分である。そして非常に意味の深い譬喩が多い。此處にある狭き門、廣き門と云つたことは、東洋人でなければ解らないことで、廣い門に狭いくくり戸が附いてゐる。之はその大きな門と、小さいくくり戸のことであつて、日本でも此のくくり戸から這入つて來る人は極親しい者だけで、普通の人は、大門を通つて來る。ユダヤの國でもさうなつて居たので、それは多分外部に對する敵を妨ぐ爲であつたであらう。有名なイエスの生れたベテレヘムの教曾等も門は大きいが入入する所は、腰をかゝめて漸く通れる位

の處である。普通は此處をくゞつて這入る。それで大きな門はあるが、何かの時でなければそれは使はなくつて、不斷は小さい門から出入をする。

イエス・キリストは、此處で、小さい門より這入れといふことを云つて居られる。實際くゞり戸を通つて來る人は少いのであるが、此處から來る人は親しい人である。私は日本の遊廓に通ふ人が一年間の延人員二千七百萬人と聞いて滅亡の道に至る人の多く、救に入る人の少い、即ち、狭い道を通る人の少いことを考へさせられる。何時の世にも眞理の道を歩く人は少い。それをイエスが狭い道と云つたことを私は意味深く思ふものである。吾々は何でも出來る譯は無いから、専門を撰んで精進をしなければならぬ。人間の力は萬能では無いから宗教に献身する人はその方に、或研究をし様とする人は、その方向に狭い道を深く行かなければならぬと思ふ。

羊の姿の狼

偽豫言者に心せよ、羊の扮装して来れども、内は毒ひ掠むる豺狼なり（マタイ傳第七章第十五節）

之は偽豫言者に對する忠告である。イエス・キリストは偽豫言者は、羊の姿で来る狼だと云つて居られる。新約時代には色々な豫言者が現れた。

神は第一に使徒、第二に豫言者、第三に教師、（コリント前書十二章廿八節）若し皆豫言せば、不信者または凡人の入り來るとき（コリント前書十四章廿四節）

等にも現れてゐる様に、教會に豫言者があつた。黙示録などにも偽豫言者に對する計畫が加はつてゐる。之等に依つても、新約時代の豫言者は特別の地位を持つて居たことが分る。豫言者とは今日の語で云へば文明批評家、即ち神を基礎にして批評し、時代を指導する人達であつて、偽豫言者とは神の立場で話す様な風をしながら、自分の都合の好いことを云ふ人達である。その間の區別が仲々六ヶ敷い。偽豫言者は人道主義的に見えるけれども、即ち小羊の如く見え

るが正體は恐ろしい狼である。例へばバクレーニンの無政府主義の如きその主張、目的は社會の平和、階級の撲滅であるけれども、その手段は秘密であり、探偵であり、暴力であり、流血である。又魂を除外した社會主義もさうであつて、目的は立派であるけれども、中を割つて見ると狼の分子がある。それであるから大体から云つて、暴力が加はつてゐるものは偽豫言者の狼主義者であると断定して差支えがない。之は政治問題だけではない。戀愛に於いても然うである。愛を肯定するといふことは立派であるが、愛の多元性を説くことは、恐ろしい分裂に導く。例へばモルモン教徒の如き原理で行けば、神は愛であるといふのであるが、愛が生理的、心理的に捧げられた時に、それを拒む資格は無いといふので、一夫多妻主義を採用してゐる。それはモルモンといふ天使が此の事を告げたといふのでモルモン教と呼ばれてゐる。其他第二世紀に於けるノスチシズムにもさういつた傾向があり、近代の自由戀愛の思想の中にも相當

之が廣まつてゐる。それは羊の風を装ふて來るが狼であるとイエスは注意して居られる。

薊と無花果

その果によりて彼らを知るべし。茨より薊菊を、薊より無花果をさる者あらんや。斯くすべての善き樹は善き果をむすび惡しき樹は、惡しき果をむすぶ。善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず、惡しき樹は善き果を結ぶこと能はず。すべて善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらる。然らば、その果によりて、彼らを知るべし。(マタイ傳第七章十六—二〇節)

イエス・キリストは社會的眞理として茲に大切なことを云つて居られる。人間の眞理が善いか、惡いかといふことは人間生活に現はしてから知られるものである。例へば進化論が間違つてゐるかどうかといふ問題に就いて考へて見ると、學說としてのダーウインの進化論は立派なものであるが、之を實行した時に強い民族が弱い民族を勝手に蹂躪したら結果は如何なるであらう。或は又レーニンの無産者獨裁の政治について考へて見ても、貧乏な無産者を解放する爲に、一時無

理にも、獨裁者を置いて政治をするといふが如き、事實は君主政體と同じものが生れるのではなからうか。學說として幾ら立派であるとしても、實行して間違ひが出来て來るならば、それは人間の眞理としては不完全なものであると云はざるを得ない。

キリスト教が今迄色々な社會學說に反對して來たのは、實行した時に良心を鈍らす様な結果を導いたものに對してであつた。明治三十三年頃、日本に本能主義が流行した。それはニイチエの感化をうけて、高山樗牛氏等が主として主張した處であつた。「理智は本能に従ふものであるから本能が盲目であることを要求するならばそれを拒み得ない」といふのである。だから遊廓に行くことも、藝者買ひをすることも必らずしも罪惡とは限らない。之等はニイチエや、シヨールペンハウエルの本能主義を惡く考へて、墮落したものと云つて差支ないと思ふ。いくら理論としてそれが正しくあつたにしても、それをやつて見て、間違つた

方向に行つて仕舞ふならば、その學説は誤謬であると云はなければならぬ。

次の時代の明治四十年は自然主義オチユラリズムの時代であつた。それを理論づけたのは島村抱月氏の如き人であるが、又ショーペンハウエルの本能主義ほんのうしゆぎから這入つて行つた岩野泡鳴氏等も此の流ながれの人である。自然主義では、善いことの外に人間には暗黒あんこくな方面があると云ふことを高調こうてうしたのであつて、此時代にはモウパッサン一派の肉慾的描寫や、ゾラの現實的描寫が流行した。成程人間には暗黒面もあることはあるが、それを延長えんじやうして迄も人間だと考へることは間違まちがひであると云はねばならぬ。

その後又日本にはデカダン主義しゆぎが流行した。之は四十四年頃最盛を極めたもので、大戦争になる迄善と悪とが逆倒さかさまに云はれて居つた。美の爲ためになら悪は構かまはない。美の爲には善をも蹂躪じゆりんする。美の爲に娼妓しやうきや藝者げいしやのあることは決して悪くはない。さう云ふのも成程理屈なるほどりくつがあることであつて、美が勝ては道徳だうとくを蹂躪じゆりんし得

ることもあるであらう。然し實際じつざいその結果は悪いのである。それは人間は美だけに、本能ほんのうだけに生きるものではなくて、暗黒あんこくな方面も持つてはゐるが、それに打ち勝かたうとする善い方面をも持つてゐる。それで凡ての學説がくせつが人間的眞理しんりとして良心を鈍だんらさぬ様ようにしなければ、その眞理は人間的眞理として失敗しうばいである。例へば、哲學てうがくとしての汎神論はんしんろんが教へる即身成佛そくしんじやうぶつの思想の如き立派りつぱなものであるけれども、その結果は罪惡けつぐわの起原きげんについて良心に責任を持たせないことになる。さうなると藝者げいしや買かひを様ようが遊廓ゆうかくに行かうが即身成佛で罪に對する責任せきにんが無くなる。だからさうした學説がくせつは哲學てうがくとしては面白いであらうけれども、人間的眞理しんりとしては落第らくだいである。マルキシズムにしても唯物的社會主義の立場から物質が人間を支配しはいするのであるからといつて來れば、酒を飲むのも放蕩はうたうするのも『物』その者の責任せきにんになつて結局結果けつぐわが悪くなつて來る。

マホメット教も然そうである。神の戰たたかひは善いといふので戰爭せんそうを肯定こていした結果は

全然他の民族を容れないで、戦争ばかりして居つて、世界を混亂せしめることが甚だしい。一々そうした例を挙げれば際限がないが、要する處人間的眞理はその實によつて知られる。即ちその社會的效果と人間的効果とを見て、善い悪いが定まるのであつて、宗教的眞理といふものは、經驗を通じてのみその効果があるかないか決定せられる譯である。其處で自づから宗教はその祖師を見る様になる。祖師がその生活態度に於いて立派であるならば、その人の云ふことは間違はない。其處に所謂哲學宗教と人格宗教といふ人間を中心とした宗教とに分れて来る。宗教ではその人間を見る。之は間違つて居らない。だから私が豪いことを云ふても私の生活が失敗であるならば全然駄目である。或人の如きは、哲學は人格だと云つてゐるが、美しい人格を持つた人の哲學はどうしても美しい。ニイチエやショーペンハウエルの哲學には彼等の腦梅毒が影響してゐるし、アランボーの思想には飲酒が影響して悲觀的なものになつたと見て

ゐる人がある。だからつとめて人格を見ることである。キリストの様な美しい人格を見ることによつて、その人の宗教が眞實であることを知ることが出来る。故に學説が立派であつても、その果が悪ければ棄て、善い。大本教の理想が立派であるとしても、それが精神病に導くならば駄目である。

最後の 一 撃

我に對ひて主よ主よといふ者、ことごとくは天國に入らず、たゞ天にいます我父の御意をおこなふ者のみ、之に入るべし。その日おほくの者、われに對して、「主よ主よ、我らは汝の名によりて豫言し、汝の名によりて悪鬼を逐ひだし、汝の名によりて多くの能力ある業を爲しにあらざや」と云はん。その時われ明白に告げん「われ斷えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れさせ」と。さらば凡て我がこれらの言なき、て行ふ者を磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。雨ふり流漲り、風ふきて其家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし（マタイ傳第七章廿一—廿七節）

此處でイエスは果の宗教を説いて居られる。唯口先きだけで、神様、キリスト様といふものだけが本當に價値ちがあるものでは無い。之と同じ意味の言葉

がルカ傳第六章の四十六節にもあるか、恐らくイエスは屢々之を云はれたものであるらしい。何時頃此の言葉を云はれたか。多分ガリラヤ傳道の中頃、イエスが大勢の弟子達を村々に送つて病人を癒したときに奇蹟を求めて多くの者が集つて來た。その光景を見てゐた弟子達に向つて、此の言葉を語られたのであると私は思ふ。だから山上の垂訓は、恐らくガリラヤ傳道の中頃にせられたものと考へて善いと思ふ。

つまりイエスは奇蹟を行つたり、癒したりする花々しい宗教經驗だけが眞の宗教ではない。眞の宗教は凡ての惡に對する救濟をしなければならぬ。即ち社會的に行き詰つた無産者に、牢獄にある人に、裸で迷ふてゐる人に愛を施すのでなければ、眞物であるとは云へない。眞の宗教とは、宇宙全体を意識して出發しなければ、即ち地上に悩みがあればそれを自分のものとして救ふてかゝることが大切なのであつて、全体を意識し、その弱い部分を復歸せしめて行くこと

いふことに努力しないものであるならば、それは宗教運動であり得ない。それをしていないものをイエスは我儘であると云はれた。

イエス・キリストは此の自分の言葉をきいて之を行ふ人を磐の上に家を建てた慧き人に擬へんと云つて居られる。ヨルダンの川は、大抵カラ／＼に乾いてゐるので、家を建てゝゐるが雨が降つたら大水が出てヒツクリ返る。ユダヤにはそんな所が多い。日本でそれと似たのは紀州の新宮で川原に家を建てゝゐるが、柱に番號をつけて置いて、さあ大水となると家をたゝんで堤防の上に逃げ上る。吾々が基礎の無い、實行性の無い、人間的眞理として表現し得ない生活を送るといふことになれば、それは洪水が來たときにたはれて仕舞ふ。今迄に多くの宗教が起つたけれども、愛を基礎にしないものは、皆たはれて仕舞つた。吾々は直きにキリストに従ふことが愚の様に見えて、一つ自分でも宗教を開いて見ようと思へる。然し愛を基點として出發する人はキリストを出發點として決し

て間違ひをしない。それを自分の名を出す爲にするのであるならば、或意味に於いて、真理の宗教には成り得よう。然し全体意識から出發して、欠けたる部分をも補ふと云ふ贈ひの宗教にはなり得ないであらう？ 宗教とは全体意識、即ち、神から始まるから愛にならざるを得ないのである。部分部分をつなぐ愛が宗教運動の中心になり、部分部分から全体を見たときに神聖の誕生がある。その愛と神聖が宗教の本質なのである。愛と神聖の無い所に、宗教運動は何時も失脚の憂き目を見る。どんな立派な哲學的要素を含むものであつても、その人生効果に於て役立たないものは、宗教的遊戯に終る。此の話の終をイエスは非常にさみしい文句で結んで居られる。「雨降り流れ漲り、風ふきてその家をうてば、倒れてその顛倒甚だし」さう云つてイエスは劇的なシーンで此の山上の垂訓を閉ぢられた。土臺がたはれた宗教があるかもしれない。イエスが希望ある福音で此の語をさらすに弟子達への警告で終つてゐる所に、深く考へねばなら

ぬ所がある。

實際、吾々は、平和な日には甘い宗教で満足するが、いざといふ時には金剛不撓の精神で行く様なものでなければ力にならない。宗教は惡に對する征服の力を持つものであらねばならない。それであるから暴風雨に對する準備のないものは眞の宗教とは云へない。イエスはそれを教へたのであつた。

天 來 の 權 威

イエスこれ等の言葉を語りへ給へるまき群集の前に踏きたり、それは學者らの如くならず、權威ある者のごまぐ教へ給へる故なり (マタイ傳第七章廿八—廿九節)

第廿八節には人々がそれを吃驚したと書いてある。それは學者の様でなく、然も學者以上の權威があつた。學者は比較し歸納し演繹するが、イエスは自ら實を指し示してかうだと發表せられるのであつた。だから代へ難い眞理が其處に動く。その通りにしなければ亡びる。それは一つの劍の様なものである。其

處に權威があつた。山上の垂訓には人間の歴史が残る間、學者も、哲學者も、社會運動者も之を見て、屢々考へなほさなければならぬ點がある。私は之を實行すれば、社會的、人間的眞理が實行せられるものだど考へる。之には倫理學の凡ての教が這入つてゐる。第五章三節―十二節には、神聖な快樂説、第五章の四十八節には、グリーン氏の唱へた完全説が、第七章七節にはアリストートル等の云ふエンテレキーの説が、第七章十六節にはウイリヤム・ゼームスの云つた實用哲學の學説が其處に秘められて居る。其處には古今東西の聖人が云つた説が皆這入つて來てゐる。それは極簡單である。譬で書いてあるから誰にでも解る。それはモーゼの申命記から教訓を引き出したものを、イエスの體驗によつて修正したものであつて、それは誠に不思議な權威ある教訓であるど考へて善いと思ふ。社會が進歩すればする程その價值が認められ、之を憲法とする國民が世界最大のものとなる。社會運動は此處から出發せねばならない。

そして之以上には出られない。之は誠に神の國運動の憲法である。

父なる神

ガリラヤの野に教へられました此の嚴肅なる垂訓に接しまして、今更ながら吾々の至らざることを思ふものでございます。キリストは吾々に對して、至大の幸福を教へ、最も完全なるものゝ姿を示し、更に又伸び上つて吾々の要求を天に迄致さなければならぬことや、自分の日々爲す仕事はその實によつて決定せられることを教へられまして、私共はあまりに養はた自分の生活を省みられ、唯聴しう存じます。單に個人として聴かしのみならず、社會になされつゝあるあらゆる社會運動を考へまして、誠の顔に見てゐながら、眞實に到着して居らないことを、神の國の餘りに遠く離れてゐることを、悲しむものでございます。

父なる神

どうか吾々にもう少し深く山上の垂訓を味はひ、イエスがガリラヤの湖を下に見ながら、教へられたその美しい御教訓が、吾々の胸に秘められて、身一つをおさめ、心一つを支配し、更に進んで一村、一つの國、一つの社會を改造するとき、キリストの心を心として、何よりも先に神の完全な理想を求め、その幸福が、その結果によつて定まることを考へさせて下さい。吾々をどうかキリスト

の名に恥かしからぬ魂として仕立て、下さい。今日の日本の窮乏に際して、日本國民の倦み疲れた魂に、此の温かい御教訓を再びハッキリ教へて下さい。日本にはガリラヤの野に勝る多くの花のあるものを、日本には何百にもあまる美しい小鳥のあるものを。吾々はそれに注意をよせず、もがき苦しんでゐることを本意なく存じます。せめても野の百合、空の鳥の美しい生活に返引返し給はんことをキリスト・イエスによつて祈ります。アーメン

スキ
トリ
山上の垂訓
終

<p>昭和二年九月二十五日印刷 昭和二年十月一日發行 昭和三年二月十日改訂六版</p>	<p>不許複製</p>	<p>スキ トリ 山上の垂訓</p> <p><input type="checkbox"/> 定價金三十五錢 <input type="checkbox"/> 送料四錢 <input type="checkbox"/></p>
<p>發行所 大阪市浪速區 貝柄町七番地 日曜世界社 振替大阪一六七四番</p>	<p>著作者 賀川豊彦 大阪府浪速區貝柄町十七番地</p> <p>發行者 西阪保治 大阪府此花區西宮町三丁目七番地</p> <p>印刷者 吉田源治郎 大阪府此花區西宮町十四番地</p> <p>印刷所 四貫島セツルメント出版部 大阪府此花區四貫島元宮町十四番地</p>	<p>發賣元 大阪市此花區 四貫島大通 三丁目七番地 四貫島セツルメント 振替大阪七八四〇九番</p>

賀川豊彦著作目録

基督傳論 争史
 貧民心理の研究
 精神運動と社會運動
 人間苦と人間建築
 日曜學校教授法
 イエスの傳の教え方
 労働者崇拜論
 自由組合論
 【詩集】涙の二分
 地殻を破つて
 イエスの宗教とその真理
 イエスと人類愛の内容
 イエスの日常生活
 イエスの内部生活
 イエスと自然の暗示
 聖書にイエスの姿
 現れたるイエスの姿
 苦難に對する態度
 愛の科征學
 空中線を越えて

太陽を射るもの
 壁の聲きく時
 星より星への通路
 雷鳥の目醒める前
 地球を墳墓として
 生命宗教と生命藝術
 【童話】友情
 【童話】讓言者エレミヤ
 聖書社會學の研究
 神と對座
 神の懷にあるもの
 【詩集】永遠の乳房
 雲水の廻路
 主觀經濟の原理
 生存競争の哲學
 講義演集
 【個人雜誌】雲の柱 (月刊)
 魂の彫刻 (宗教教育の實際)
 暗の中 隻語
 殘されたる刺 (逆境への福音)
 人類への宣言 (新約聖書の精神)

賀川豊彦新著リーフレット

◇大衆傳道運動のための唯一の散彈!!!

百萬人運動リーフレット
 神と日本の更生
 神の國運動リーフレット
 神による新生

精神文化リーフレット第一編
 魂のまつり

精神文化リーフレット第二編
 救いの生活

精神文化リーフレット第三編
 難局打破の精神

精神文化リーフレット第四編
 完全なるもの、姿

◇此のリーフレットを七千萬の同胞に配布せずや?

菊版八ツ載
 表紙共八頁
 定價千部金四圓
 壹萬部卅五圓
 (送料共)

四六版
 表紙共四頁
 定價壹千部
 金參圓貳拾錢

壹萬部
 金貳拾七圓
 (送料共)

發行所 大阪四市大島大通三七番 四島セツメルトン

賀川豊彦新著

愛登叢書第一編

看護婦崇拜論

一冊金拾錢
送料二錢

弱者をいたわり、病人を保護すると云ふことは天の使の様な心持ちを持つてゐるものでなければ容易にできるものではない。世の中の多くの人が金儲けに忙しく奔命してゐる時に我身を忘れて血も續いてゐない人の爲めに徹夜までして苦勞することは並大抵の人間に出来るわけではない。看護婦の仕事は正しくイエスキリストの精神から出たものである。(著者)

愛登叢書第二編

病人慰安法

一冊金拾錢
送料二錢

著者の體驗からにじみでた慰安法だ。病氣治療の十分の八迄は看護の力である。如何にしてあなたの愛する者の病をみとるべきか？病床のあるところに本書を普及せしめよ！

發賣 大阪市四貫島大通三七番九
振替 大阪七四〇九番
四貫島セツルメント

賀川豊彦著

人類への宣言

新約の精神

四六判
約六百頁
定價送料
共壹冊
壹圓八錢

著者永年の體驗と瞑想と研究とによつて書かれた新約聖書大系である。新約一卷と共に本書を必ず座右に備ふべきである。(御注文は前金のこと)

東京市京橋區尾張町二丁目

發行所

警醒社書店

大阪市此花區四貫島大通三丁目

取次

四貫島セツルメント

振替 大阪七四〇九番

賀川豊彦新著

キリスト代記の話

四六判約五百十五頁
宗敎名書八葉挿入
定價送料共金三十四錢

人間の歴史の頂点を歩いたキリストの一生は一つのダイナマイトの様なるものである。
彼の一生に觸れて過去何千萬人が新しい方向へと人生の彈道を辿つたか？著者は年十五にしてキリストに乗りうつられ、今も尙キリストの十字架を脊にくくりつけて奉仕と贖罪の道を辿つてゐる。

發行 大阪大市速區具柄一七番
大阪大市速區具柄一七番
大阪大市速區具柄一七番
大阪大市速區具柄一七番
大阪大市速區具柄一七番
大阪大市速區具柄一七番
大阪大市速區具柄一七番
大阪大市速區具柄一七番

賀川豊彦會長

消費組合

協會

の使命

▼國産運動

同胞兄弟達の奢侈怠惰は尙言語に絶するに餘りがある。
先づ吾等は徹底的國産運動をおこし賀川豊彦氏創案の賀川服を一着する。

▼消費組合運動

營利の支配せざる愛と平和に充ちた社會を實現の爲に吾等は全國的消費組合運動の確立に努力する。

事業の一つ

スコツチ地脊廣服

大 四圓六拾錢
中 四圓四拾錢
小 四圓貳拾錢

コール天脊廣服

大 八圓五拾錢
中 八圓五拾錢
小 七圓五拾錢

セル地脊廣服

大 四圓貳拾錢
中 四圓貳拾錢
小 參圓八拾錢

電話土佐堀三一〇四番 振替大阪七八九七五番 大阪市西區江戶堀下通五丁目

【呈進録型第次込申御】

▼帽子

貳圓

▼石鹼

拾錢

▼ワヰンシャツ

壹圓五拾錢

▼メリヤス

壹圓參拾錢

▼オパークート

拾五圓

▼毛布、其他

拾五圓

賀川豊彦著
傳道用普及版

イエスの宗教と其眞理

◇ 定價三十五錢
送料四錢

神による解放

◇ 定價三十五錢
送料四錢

苦難に對する態度

◇ 定價三十五錢
送料四錢

イエスと人類愛の内容

◇ 定價三十五錢
送料四錢

〔付譜本〕

由木 康作

美はしの日の本

送料共五錢

賀川氏の神の國運動の
軍歌として今や大都市の流
行歌とならんとしてゐる
百万人運動の進行曲は
これだ！

次取

大阪市四貫大島通三七番九
替振穴阪七四八〇番

四貫島セツメルン

終

